

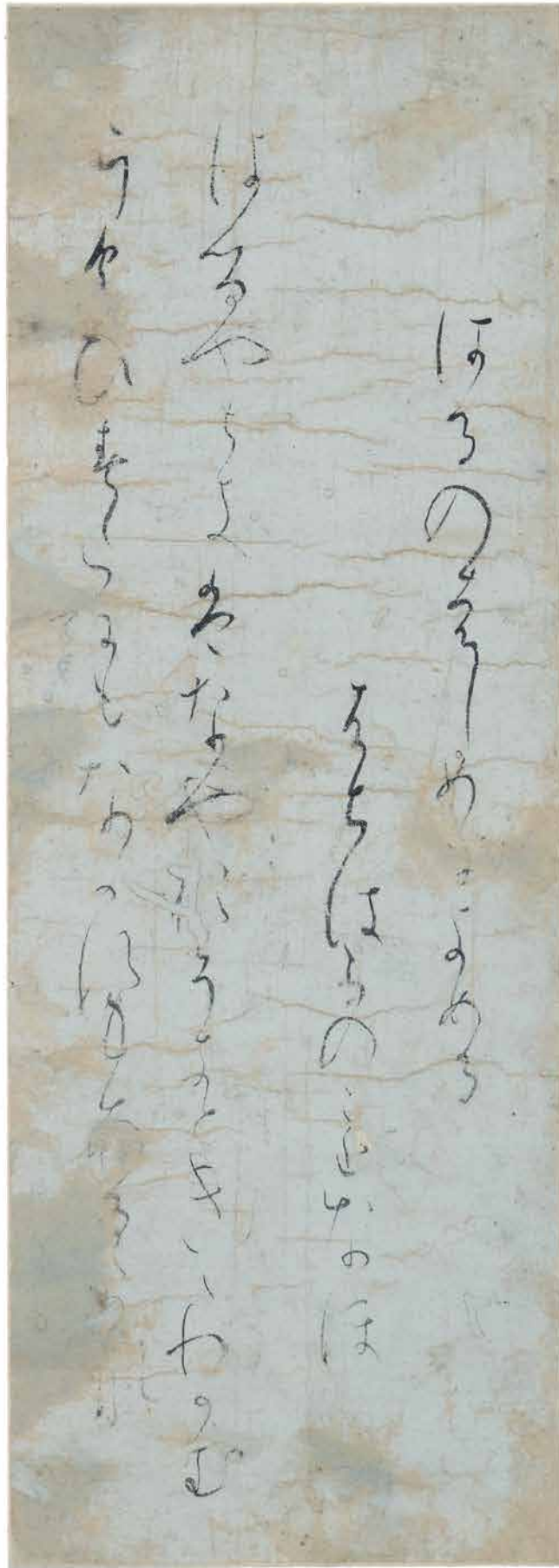
出光美術館研究紀要第三十一号抜刷  
二〇二六年三月二十五日発行

# 古筆手鑑「見努世友」について（4）

— 収載される古筆切に注目して

金子 馨

宗尊親王 日向切



古筆手鑑「見努世友」について(4)——収載される古筆切に注目して「金子馨」

口絵1 日向切（古筆手鑑『見努世友』のうち） 伝 宗尊親王 国宝 出光美術館

## 古筆手鑑「見努世友」について(4)——収載される古筆切に注目して

金子 馨

はじめに

- 一、手鑑に収載される古筆切の共通点
- 二、伝宗尊親王筆「日向切」に注目して
- 三、古筆切の裏書の内容について

結びにかえて

附表1 「藻塩草」「見努世友」収載古筆切対比一覧

附表2 「見努世友」収載古筆切裏書(墨書)一覧

### はじめに

出光美術館に所蔵される古筆手鑑「見努世友」(国宝)は、江戸時代に古筆の目利きを家業とした古筆家の基準台帳として、古筆家宗家十代・了伴(一七九〇—一八五三)によって調製された古筆手鑑「藻塩草」(国宝、京都国立博物館蔵)や古筆家別家の古筆了伴(二六五五—一七三六)の手による古筆手鑑「翰墨城」(国宝、静岡・MOA美術館蔵)とともに「三大手鑑」と呼ばれている。とりわけ、「藻塩草」と内容が近似していること

から、「見努世友」も古筆了伴の手による可能性が指摘されてきた。

しかし、前稿(『出光美術館研究紀要』第三十号)において手鑑の配列(古筆切が押されている順序、構成)に注目して「三大手鑑」の配列を比較すると、それぞれ異なる特徴が確認され、時代や制作者(調製者)の趣向が反映されていることを指摘した「註1」。つまり、内容の近似性が説かれ同一人物(了伴)の手によるものと考えられてきた「藻塩草」と「見努世友」は、同一人物の制作・調製と断定しきれないと言える。

そこで、本稿では両手鑑に収載される古筆切に注目し、その連関について比較・検証することで、両手鑑の関係性について今少し迫りたい。また、古筆本家旧蔵資料(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵・センチュリー赤尾コレクション)に注目すると、古筆手鑑「見努世友」に収載される伝宗尊親王筆「日向切」などに関する記述(注記)が確認できるため、本稿において触れておきたい。

さらに、前稿(『出光美術館研究紀要』第二十七号)「註2」において言及した裏書(墨書)についても情報を整理し、改めて考察を附すものである。

## 一、手鑑に収載される古筆切の共通点

前稿において「三大手鑑」の配列を比較した上で、古筆手鑑「藻塩草」と「見努世友」は、「構成（配列）が近似していることが再確認できたが、一部で相違も確認されるため制作者や制作時期については検討の余地が残る」と言及した〔註3〕。

しかし調製時期の違いや、どちらか一方が伝来の手鑑（例えば「藻塩草」は目録のみ了伴了伴以前の調製であるなど）であった場合など、配列に違いが確認できても不思議ではない。そこで、本稿では両手鑑に収載される古筆切に注目し、両手鑑の近似性について探ってみたい。

両手鑑については澤恭三氏は、「見努世友」（表一一七葉、裏一一二葉の計三二九葉）・「藻塩草」（表一一七葉、裏一二六葉の計二四二葉）〔註4〕両手鑑に収載される古筆切を対照した上で、「見ぬ世の友」に有って「藻塩草」に無いものが一一八種、「藻塩草」にあつて「見ぬ世の友」に無いもの一二九種である。この両者を合わせることによって、室町時代以前の古筆切の殆んどが網羅せられている」と述べている〔註5〕。つまり、両手鑑には一一一種の重複が確認される。両手鑑の内容（重複状況）については稿末の「附表1」（古筆切対比一覧）を参照されたい。

両手鑑が同一人物の手によるか、あるいは同時期に古筆家に存在したものであれば、古筆手鑑を調製する際、内容を充実させるために手許にある古筆切を分割し収載した可能性も考えることができるだろうか。しかし、両手鑑の内容の精査を行い関連性について比較検証を試みたが、思っていた程連続する古筆切はあまり多くない。伝源実朝筆「中院切」、隆尊筆「金峯山切」の二種が連続するばかりである。

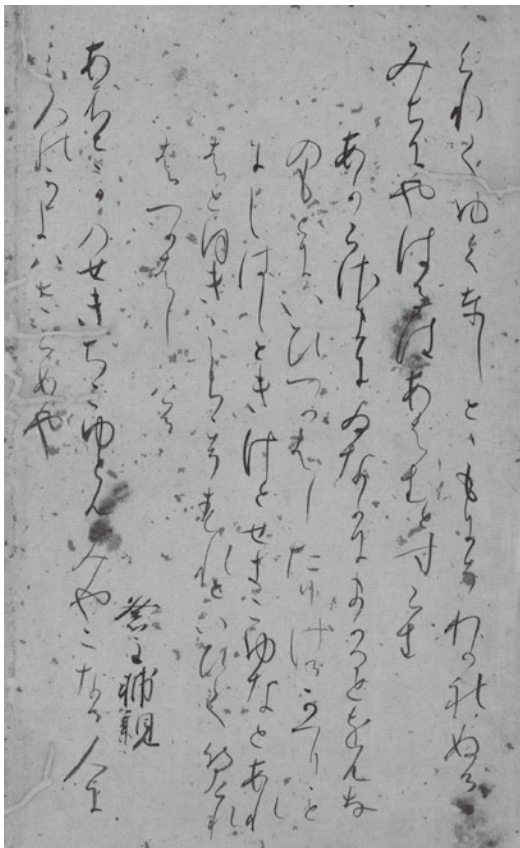


図2 中院切（古筆手鑑「見努世友」のうち）  
国宝 出光美術館

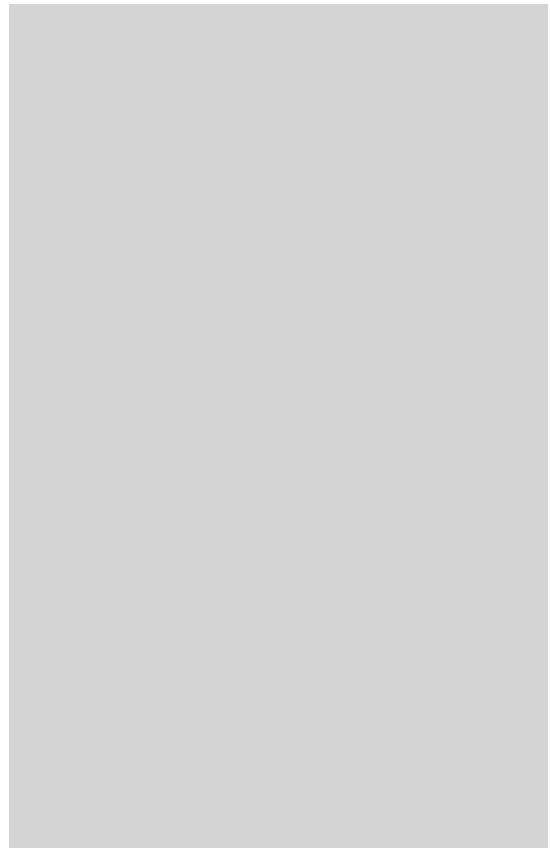
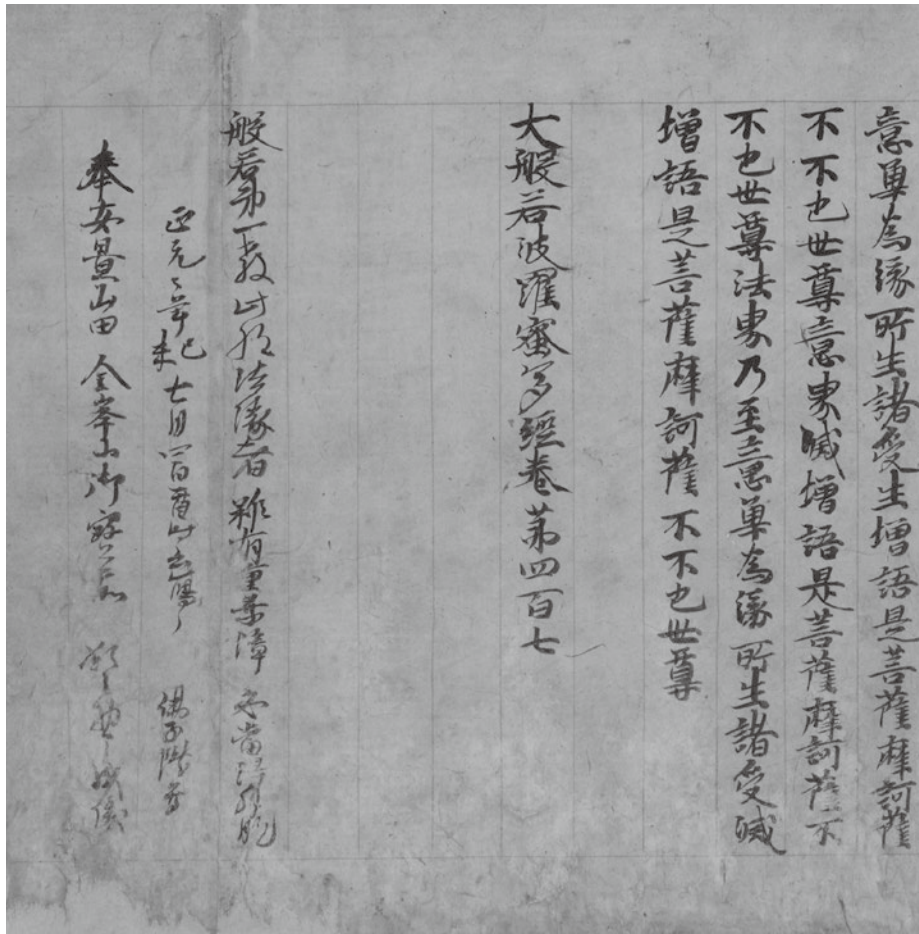


図1 中院切（古筆手鑑「藻塩草」のうち）  
国宝 京都国立博物館



右/図4 金峯山切(古筆手鑑「藻塩草」のうち) 国宝 京都国立博物館  
 左/図3 金峯山切(古筆手鑑「見努世友」のうち) 国宝 出光美術館

伝源実朝筆「中院切」は『後拾遺和歌集』の断簡で、両手鑑に押されているものは卷八・別の断簡である。「藻塩草」に押される一葉(裏一〇番)は四八八番歌の断簡で「図1」、「見努世友」に押される一葉(表一三番)は四八九・四九〇番歌の断簡「図2」で前後に連続する。虫損痕の状況から、両断簡は表裏の関係であったことがわかる。少なくとも「藻塩草」調製時には相剥ぎされていたことは相違ないが、伝来を示す記録はなく、いつ相剥ぎされてそれぞれの手鑑に貼り込まれたかは不明である。

次いで両手鑑に押されている「金峯山切」は、『大般若波羅蜜多經』卷第四百七(第二分善現品第六之二)の断簡で、「見努世友」に押される一葉(裏九六番)は卷末の断簡「図3」で、「藻塩草」に押される一葉(裏八二番)は「見努世友」収載断簡の前に位置するものである「図4」。「金峯山切」は元卷子本で、前後に連続する。「見努世友」収載断簡の方が内容のよい箇所が収められていると言えようか。

また、連続する断簡ではないが、伝邦省親王筆「松梅院切」は、「見努世友」収載断簡(表三三番)が「北野社法楽和歌(元徳二年)」巻頭部分の断簡「図5」に対して、「藻塩草」収載断簡(表三四番)は巻末部分の断簡「図6」が押されており、両手鑑の連関を考えてみたくなる。



図6 松梅院切  
(古筆手鑑「藻塩草」のうち)  
国宝 京都国立博物館

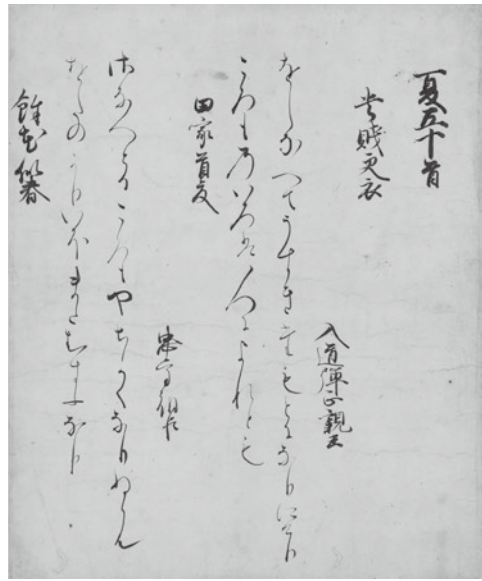


図5 松梅院切  
(古筆手鑑「見努世友」のうち)  
国宝 出光美術館

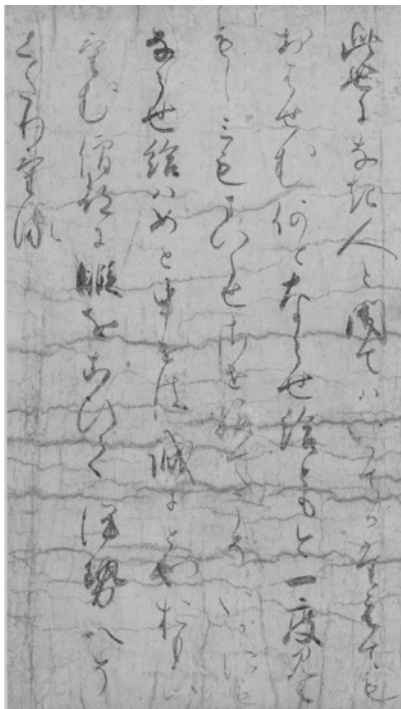


図9 栗田切  
(古筆手鑑「見努世友」のうち)  
国宝 出光美術館

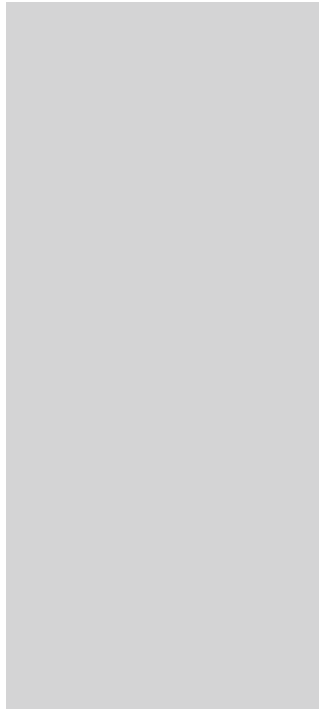


図8 栗田切  
(古筆手鑑「翰墨城」のうち)  
国宝 MOA美術館

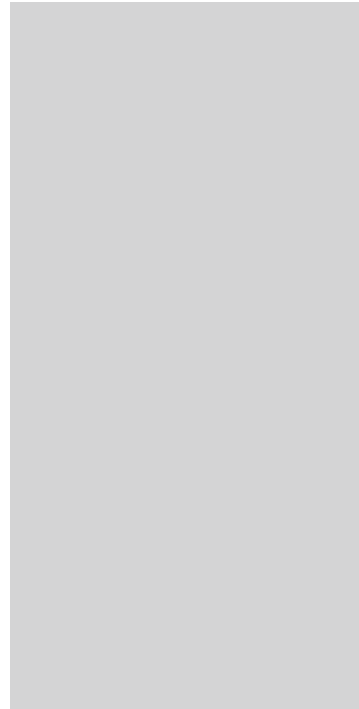


図7 栗田切  
(古筆手鑑「藻塩草」のうち)  
国宝 京都国立博物館

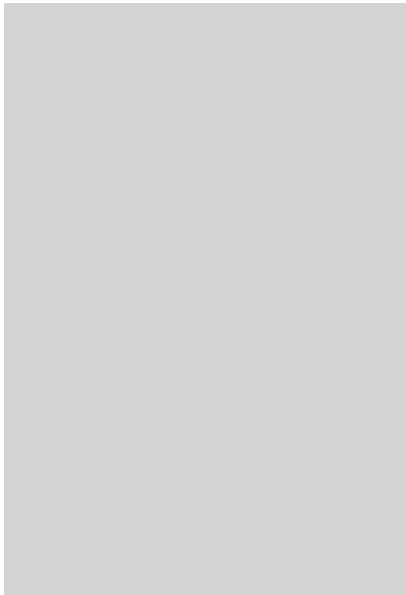


図 10-2 吉野切  
(古筆手鑑「藻塩草」のうち)  
国宝 京都国立博物館

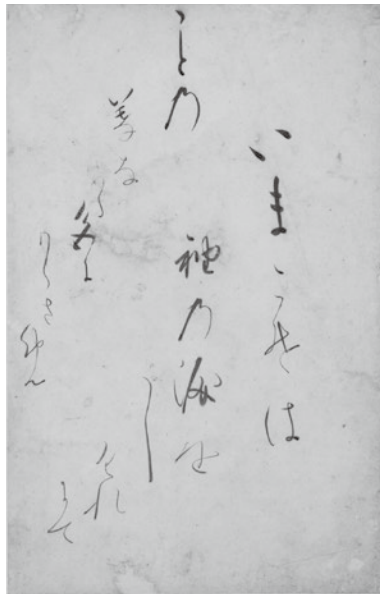


図 10-1 吉野切  
(古筆手鑑「見努世友」のうち)  
国宝 出光美術館

両手鑑の収載断簡だけでは連続しないが、伝藤原信実筆「栗田切」は、古筆別家に伝来した古筆手鑑「翰墨城」に押されている一葉を挟むと三葉が連続する。「栗田切」は『法然寺地藏縁起絵巻(地獄験記絵巻)』の詞書の断簡で、「藻塩草」収載断簡「図7」、「翰墨城」収載断簡「図8」、「見努世友」収載断簡「図9」の順で連続する。関連性を考えたいが、『翰墨城』は江戸時代前期に制作された手鑑であるため、偶然の連続と言え

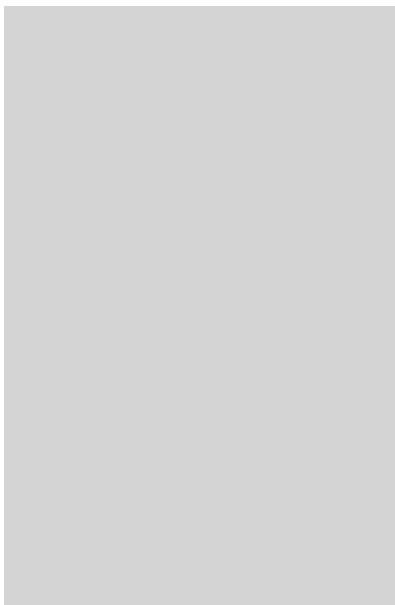


図 11-2 六条切  
(古筆手鑑「藻塩草」のうち)  
国宝 京都国立博物館

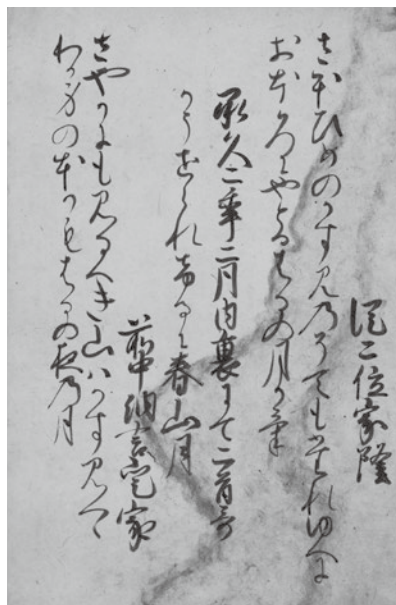


図 11-1 六条切  
(古筆手鑑「見努世友」のうち)  
国宝 出光美術館

よう「註6」。  
さらに、両手鑑に希少な断簡である伝後醍醐天皇筆「吉野切」(「見努世友」表二三番、「藻塩草」表二四番)「図10」、伝光厳天皇筆「六条切」(「見努世友」表二四番、「藻塩草」表二五番)「図11」、伝光明天皇筆「天龍寺切」(「見努世友」表二五番、「藻塩草」表二六番)「図12」が共通して押されている点は特記すべきことであろうか。同じく伝後光厳天皇筆「兵庫切」は、「見

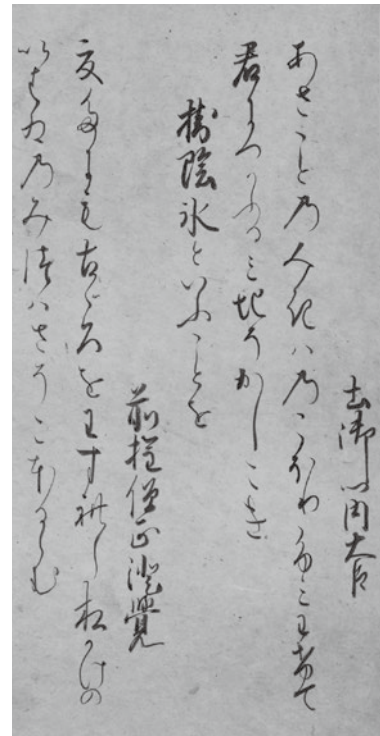


図 12-1 天龍寺切  
(古筆手鑑「見努世友」のうち)  
国宝 出光美術館

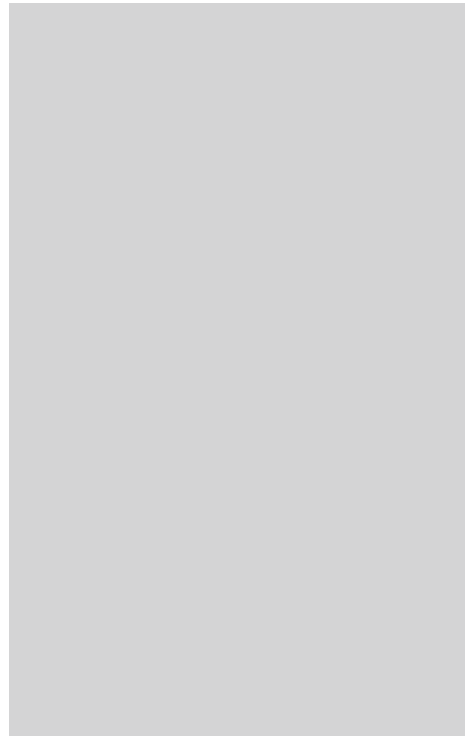


図 12-2 天龍寺切  
(古筆手鑑「藻塩草」のうち)  
国宝 京都国立博物館

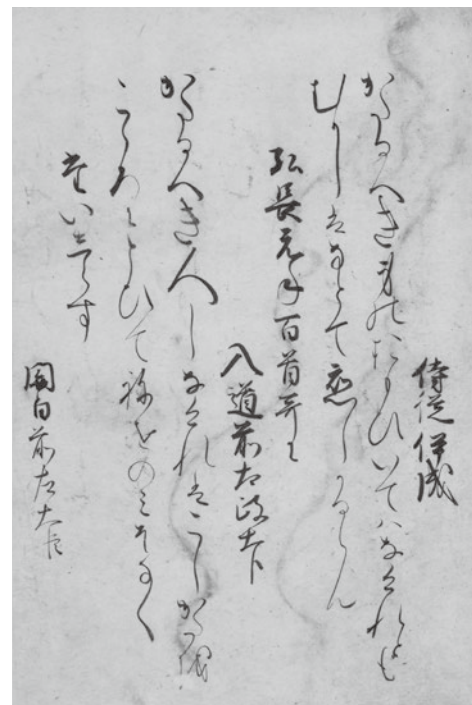


図 13 兵庫切 (古筆手鑑「見努世友」のうち)  
国宝 出光美術館

古筆別家三代・了延(一六五六―一七三六)の手になる『古筆切名物』には、それぞれ以下のように記載が確認できる(該当する箇所のみ抜書きする。／は改行、以下同)「註7」。

光嚴院 四半切 青紫雲紙集不知／十一行或九行  
光明院 四半雲紙 集新勅撰 又続後撰  
後光嚴院 尾張切 四半古今／後撰  
四半切 杉原紙／集不知

古筆本家七代・了延(二七〇四―七四)撰『古筆類葉集』(明和七年(一七七〇))には、

光嚴院 四半切 紫青雲紙 集不知 十一行或九行

努世友」(表二七番)「図13」に押されているが、「藻塩草」にはなく「葉室切」(尾張切)とも)が押されている。

さて『古筆名葉集』などの諸本に目を通すと、安政五年(一八五八)刊『増補新撰古筆名葉集』に「六条切」「天龍寺切」の名が確認できるものの、それ以前の諸本に名が見られるか確認しておきたい。

光明院 四半雲紙 集新勅撰 又続後撰 長八寸余歌二行書巾四寸九分一面八行

後光厳院 尾張切 四半古今後撰 長八寸巾五寸二分  
四半切 杉原紙 集不知

と見られ『古筆切名物』と同じ内容が確認できるものの、名物切の名称は記載がない〔註8〕。『古筆名葉集』（文化五年（一八〇八）版）の天皇の記載は後醍醐天皇までで、「後醍醐天皇 吉野切 四半皆戀哥也一首チラシ書」と「吉野切」の名は早くから確認できるが、「六条切」、「天龍寺切」、「兵庫切」の記載は確認できない。

『古筆名葉集』諸本を通覧したが、各古筆切の特徴に合致する内容は確認できるものの、『増補新撰古筆名葉集』（安政五年版）以外の諸本には名が見られなかった。なお、安政五年版には、以下のように記載されているが「兵庫切」の名称は確認できない（括弧内、稿者補記）。

後醍醐天皇 吉野切 中四半形哥戀述懷御自詠古哥交り一首チラシ書

光厳院 六條切 四半雲帟續古今ノ異本歟未詳

光明院 天龍寺切 四半雲帟集不詳哥二行書

後光厳院 同（四半） 續古今異本雲帟哥二行書

また、「藻塩草」に附属する了伴の目録（弘化四年（一八四八）には「六条切」「天龍寺切」の名称が見られ、少なくとも了伴の頃（江戸時代後期）にはそのように呼ばれていたことがわかる。つまり、これらの名物切の

名が小札（極札）に見られる「見努世友」は、その調製時期を江戸時代後期以降と限定することができようか。

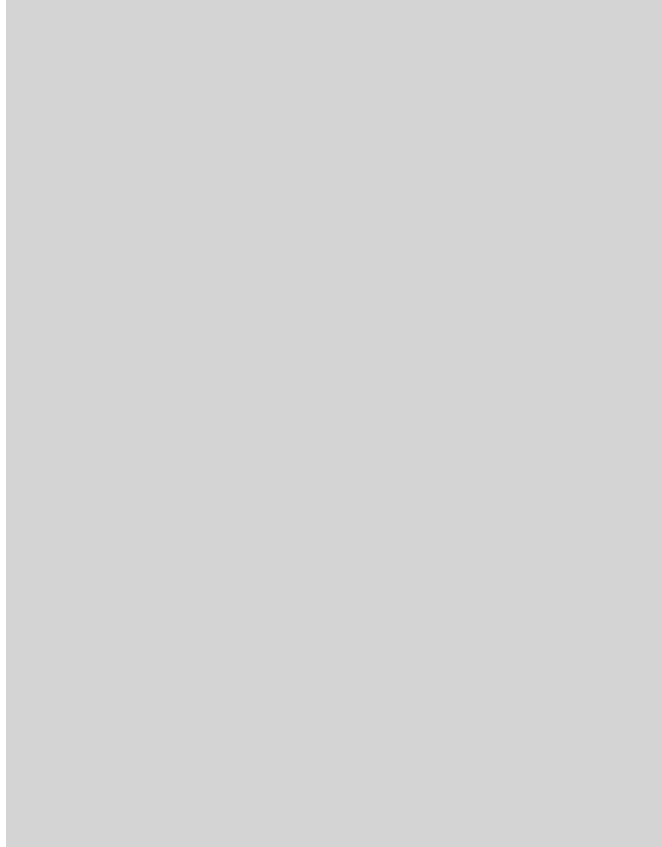
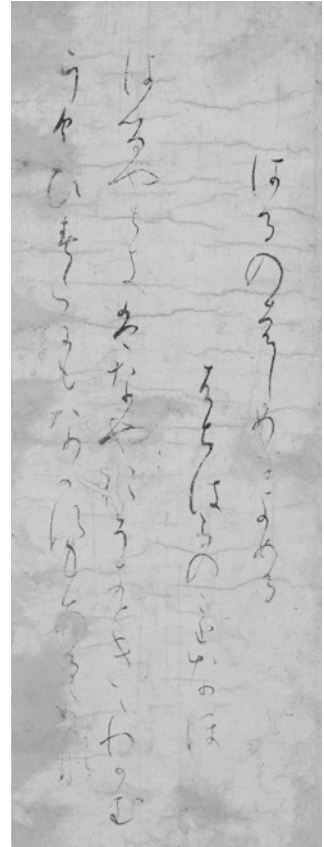
## 二、伝宗尊親王筆「日向切」に注目して

古筆手鑑「見努世友」に押される伝宗尊親王筆「日向切」は、稀少な古筆切の一つである〔図14、口絵1〕。当該断簡は全体に青白い具引きがなされた料紙が用いられ、書写時期は異なるが伝大式三位筆「端白切」のような料紙の特徴が見られる。「日向切」は『古今和歌集』巻第一（春歌上）の第一〇番歌が二行で書かれており、小松茂美編『古筆学大成』には以下のように記される〔註9〕。

……紙面の中に横皺が多く目立つので、もとは長い一巻の巻物であったことがわかる。しかも、本紙の荒れた状態などから、永い伝世の跡をたどったことを思わせる。紙は具引き地の藍色の紙で、かなりの古様を示している。

わずか四行分の断簡ながら、これは『古今集』（巻第一・春歌上）の一部であることが知られる。仔細に見ると、一字一字の結構がたどどしく、字行の中心線にゆがみがみえる。これは、模写本にしばしば見られる現象である。明らかに、これは何かの原本を踏まえた模写本にまぎれもない。書かれている字体や書風から、それが「高野切古今集」（第一種書風）の模写であることが判明する。

小松氏が指摘する通り、「日向切」は伝紀貫之筆「高野切第一種」に



右/図14 日向切 (古筆手鑑「見努世友」のうち) 伝 宗尊親王 国宝 出光美術館  
左/図15 高野切第一種 伝 紀貫之 重要文化財 遠山記念館

似た様相を示しており、当該断簡と重なる箇所〔図15〕が遠山記念館に現存する。両断簡を比較すると、「高野切第一種」の模写本（字配りや文

字造形などが一致するため、臨書されたものか）であることは一目瞭然である。また、久曾神昇氏は『古筆切影印解説 I 古今集編—久曾神コレクシオン』（風間書房、一九九五年）において、架蔵の伝紀貫之筆「日向切」を紹介している〔註10〕。しかし、ここで紹介される一葉は「日向切」と紹介されているものの、付されている極札には「紀貫之高野様切金砂子時」と記されている（極印もなく新しい札か）。

久曾神氏蔵の伝紀貫之筆「日向切」も「高野切」に似た様相であるが少し異なる。「見努世友」収載断簡が具引きされた唐紙風の料紙に「高野切第一種」を臨書している一方、後者は金砂子が撒かれた料紙に「高野切第二種」の書風で記している（書写される内容は『古今和歌集』第一五二番歌）。行の揺れや線に鈍さが感じられるため、当該断簡も「高野切第二種」の臨書と考えられるが、合致する箇所が現存していないため断定しがたい。

さて、『古筆名葉集』類に「日向切」の名称が確認できないか、「宗尊親王」の記載を一通り確認しておきたい（傍線、稿者補記）。〔註11〕

○『古筆家秘書』（内閣文庫蔵）

万葉切 飛雲

同 上下二ヶ 七寸 哥二行 飛雲

（黄紙 三方ニ墨野アリ）

真経 ケ六寸八分 八分 十四字一行

古今 八寸一分 無地ノ紙

（巻物切 拾遺哥二行書 貫之三似リ）

（朗詠 詩長六寸二三分 哥長七寸七分 二行作者有）

○『古筆切目安』（享保七年（一七二二）写、静嘉堂文庫蔵）

卷物切 拾遺似り貫之

真名切

香色紙

（古今ハイカヒ切 豎長二行書手鑑）

○『古筆名物集』（京都市歴史資料館蔵、寄託資料）

卷物切 拾遺哥二行書／貫之二似タリ

万葉切 黄紙哥二行／三方ニ墨野アリ

○『類葉集（古筆類葉集）』（岡山大学池田家文庫蔵）

宗尊親王

卷物切 拾遺 似貫之 歌二行書

真名切 紙色紙

万葉切 紙黄色歌二行書 三方ニ墨野アリ

四半切 歌二行書 古今

○『古筆類葉集』（蓬左文庫蔵）

卷物切 拾遺 似貫之

真名切 香色紙

（伊伊行 四半万葉集 雲切真名一行 仮名ハ一行）

○『古筆名葉集』（文化五年版）

卷物切 拾遺集哥二行書貫之二似タリ

萬葉切 黄紙哥二行書三方ニ墨野アリ

○『増補古筆名葉集』（安政五年版、明治十八年版も内容は同）

有栖川切 四半万葉飛雲昏四方ニ墨卦アリカナ哥二行書

催馬樂切 四半飛雲昏白卦朱書入アリ

四半切 古今哥二行書

同 万葉黄紙砂子少アリ哥二行書

卷物切 同金銀泥画カナ哥二行書

同 同仙花昏墨卦片カナ朱星アリ

同 拾遺哥二行書貫之二似タリ

同 哥合ウタ二行書作者名勝負アリ

同 仙花昏詩墨卦片カナ朱星アリ

経切 白昏墨卦墨字一行十五六字

諸本には右のように記される。当該断簡の特徴に重なる記載に傍線を附したが、「日向切」の名称はいずれにも確認できない。記載内容に注目すると、「卷物切 拾遺哥二行書貫之二似タリ」と見られる。「日向切」が「高野切」の臨書ということ、「高野切」が伝貫之筆であることから「貫之」風の書風は合致するが、いずれも『拾遺和歌集』の断簡で「日向切」の書写内容とは一致しない。

『古筆家秘書』の「古今 八寸一分 無地ノ紙」、『古筆切目安』（補記）の「古今ハイカヒ切 豎長二行書手鑑」、は、内容こそ『古今和歌集』で一致するが、「無地ノ紙」であったり、「俳諧歌」の断簡であったりと「見努世友」収載の「日向切」の特徴・内容とは異なる。

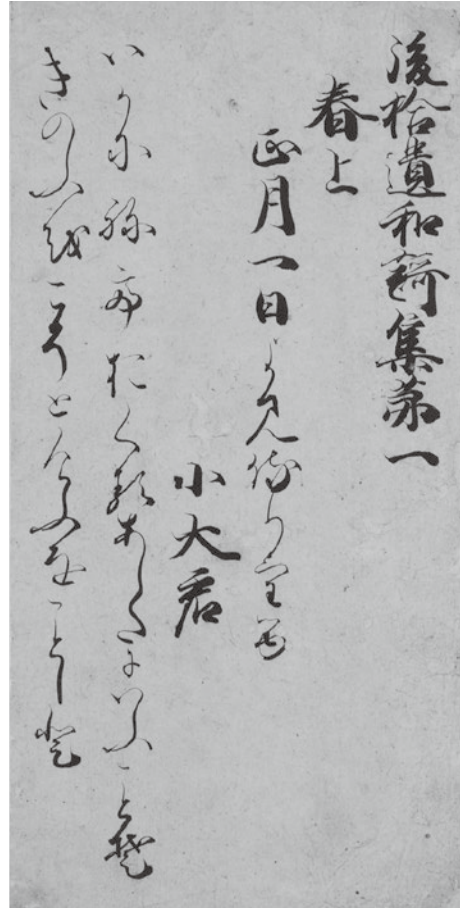


図16 持明院切  
(古筆手鑑「見努世友」のうち)  
国宝 出光美術館

記載の中では、『類葉集(古筆類葉集)』の「四半切 歌二行書 古今」、『増補古筆名葉集』の「四半切 古今哥二行書」が「日向切」の内容に合致はするが、特徴を示す記載がなく断定には至らない。

そこで、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫(センチュリー赤尾コレクション)所蔵の埴忠宝増補『増補古筆名葉集』(安政五年版、セコ典012)に注目すると、「宗尊親王」の項に「日向切/巻物切/カラ帯地/アイ色々々アリ/四半豎長」と加筆され、「日向切」の名称が確認できる上、「見努世友」収載断簡の特徴と合致する。当該資料は古筆本家旧蔵資料で、安政五年(一八五八)以降古筆本家の誰かが加筆したことが想像に難くない。ただし、「見努世友」の名称や「日向切」の伝来に関する記述は確認できない。

さらに名物切の名称に注目すると、伝清水谷実秋筆「持明院切」(見

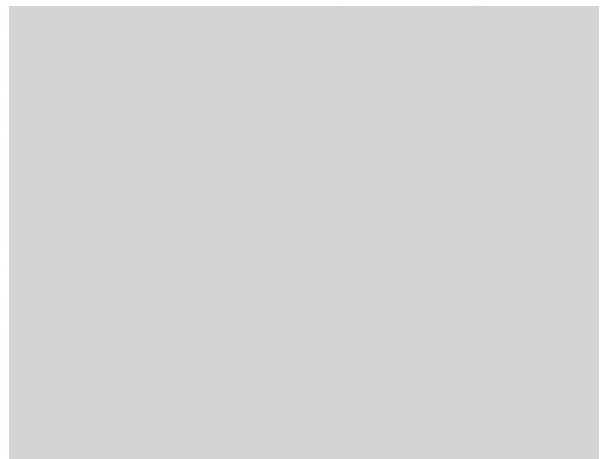


図17 持明院切本後拾遺集巻1残簡 伝 清水谷実秋  
南北朝時代 慶應義塾大学斯道文庫

努世友」表五六番)「図16」も同様のことが言えよう。「持明院切」は『後拾遺和歌集』の断簡であり、「見努世友」収載断簡は巻頭に位置する断簡である。当該断簡は寸法や筆跡などから、斯道文庫(センチュリー赤尾コレクション)に伝来する零本(巻一、綴葉装)「図17」のツレと考えられる(「見努世友」収載断簡の寸法や行数から、詠者名および和歌一首分の三行を欠いている。字高二・一センチメートル)。センチュリー赤尾コレクションの零本には包紙が付属しており、十二代了悦(二八三―一九四)の墨書「清水谷実秋卿/持明院切/春の部/後拾遺集」が確認される。『古筆名葉集』諸本にはその名は見えないが、『増補古筆名葉集』(明治十八年坂昌貞刊、セコ典007)に朱で「持明院切」と加筆されていることが確認されている【註12】。

つまり、当該断簡が古筆家で切断され「見努世友」に押されたものか

推測の域を出ないが、明治十八年（一八八五）までは「持明院切」の名称で認知されていなかったと言えようか。そのように仮定すると、古筆手鑑「見努世友」の小札（極札）に「持明院切」の名が見えることから、明治十八年以降の調製の可能性も視野に入れる必要があるだろう。

### 三、古筆切の裏書の内容について

前稿において、古筆手鑑「見努世友」の修復を経て、本紙裏面あるいは裏打紙に墨書が確認されたことについて触れ、どのような記載が見られるか、いくつかの例を取り上げて紹介するとともに、記載される情報をもとに調製時期について言及した〔註13〕。本稿では、裏書の内容を一覧〔附表2〕に示すとともに、改めて考察を附すものである。

裏書の記載は本紙裏だけでなく、裏打紙にも確認され、伝来途次幾重にも記録がなされてきた様子がうかがえる。その多くは筆者名（伝称筆者）や古筆切の内容を書き記したものが多く、中には手鑑の調製（製作）時期を狭めることのできる情報も確認できる。その一つが極めに関する記載である。

現在の手鑑には小浜酒井家の目録が付属するばかりであるが、裏書の内容を辿ると、かつては（一部の古筆切には）極札などの極めが附属していたことが確認される。その一部については前稿でも取り上げたが、精査してみると下記のような一覧にまとめることができる。

古筆名家二代・了栄（一六〇七―一七八）……表98

古筆名家五代・了珉（一六四五―一七〇一）……裏83

古筆名家六代・了音（一六七四―一七二五）……表7、表10、表24、表

30、表41、表47、表73、表102、表104、裏20、裏26、裏39、裏54、

裏59、裏74、裏79、裏110

古筆名家七代・了延（一七〇四―一七四四）……裏8

古筆名家九代・了意（一七五一―一八三四）……表64、裏77

古筆家別家三代・了仲（一六五五―一七三六）……表115、裏63

「見努世友」収載古筆切には古筆本家の極めが中心であり、中でも了音の極めが多く付属していたことがわかる。すべての古筆切に極めが附属していたわけではないため断定できないが、古筆本家の極めが多く附属していた状況から当該手鑑（あるいは古筆切）が古筆本家に関わりのある手鑑であると、裏付けることもできようか。

また、伝崇光天皇筆の歌切（表二六番）の一枚目の裏打紙には、了音門人の浅井不舊（生没年未詳）の印が捺されているほか、畠山牛庵（表一〇番・表九〇番）や朝倉茂入（裏三三番）の名も見られるなど、古筆家以外の古筆見の名も確認されるが、牛庵・茂入に至っては何代目の極めが伴っていたか裏書の情報だけでは不明瞭である。

なお、本紙や裏打紙に捺される印は複数確認され、それらが特定されることで調製者に迫ることもできそうだが、判読不明なものが多い。印影がはつきり見えても、今回の調査では誰の鑑定印・蔵印か特定できなかったものも少なくない〔註14〕。

さて、裏書は各古筆切が伝来途次に書き加えられてきた歴史を物語るものでもあるが、裏書の筆跡に注目することで調製時期について少しでも迫ることができるであろうか。しかし裏書の筆跡は多岐にわたり、古



図 21 古筆手鑑「藻塩草」附属目録（後深草天皇、部分）  
京都国立博物館

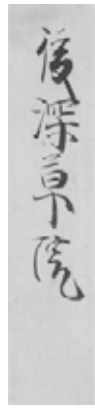


図 18-2  
表 12 番  
(極札)

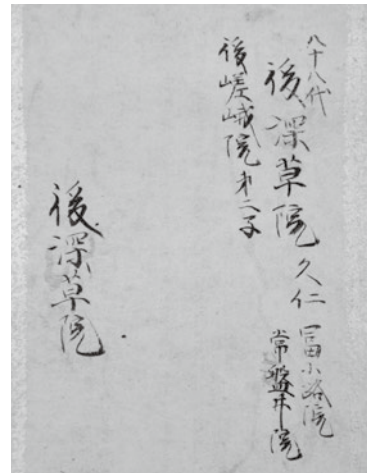


図 18 表 12 番  
(本紙より 1 枚目) 裏書

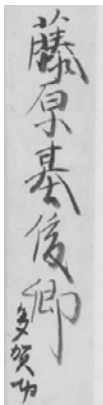


図 20-2  
裏 26 番  
(極札)

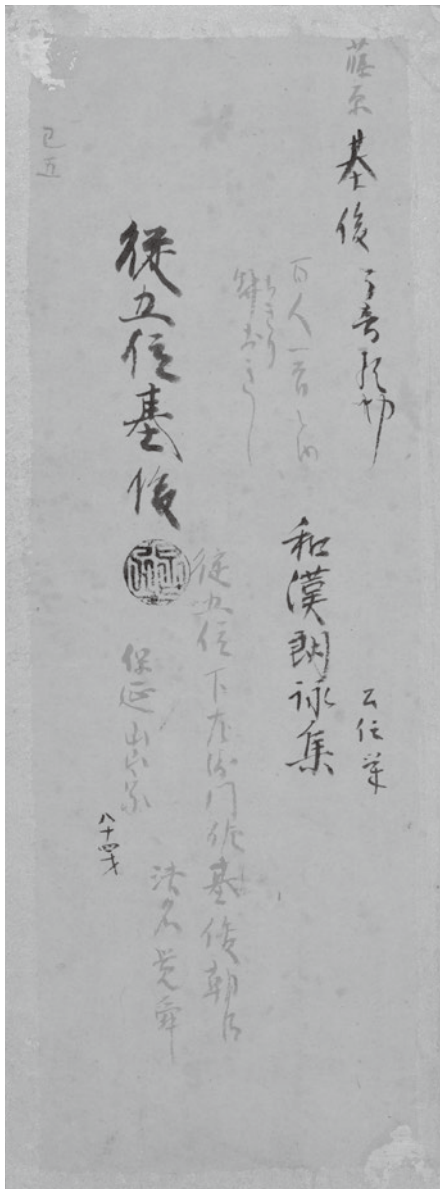


図 20 裏 26 番 (本紙より 3 枚目) 裏書

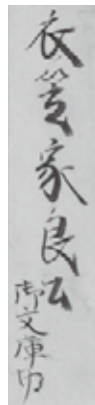


図 19-2  
表 52 番  
(極札)

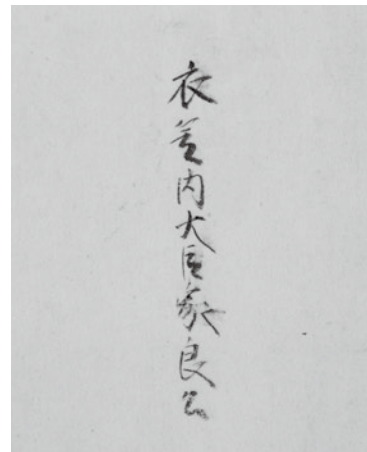


図 19 表 52 番  
(本紙より 3 枚目) 裏書

筆本家歴代の中には筆跡が近似している人物が見られるため、それぞれの筆跡の特定は困難を極めるが、了伴あるいは了悦の筆と思しいものはいくつか挙げておきたい。

ここでは、伝後深草天皇筆「常盤切」(表一二番、一枚目裏打紙)「図18」、伝藤原家長筆「御文庫切」(表五二番、三枚目裏打紙)「図19」、藤原基俊筆「山名切」(裏二六番、三枚目裏打紙)「図20」を掲出した。これらの三種はそれぞれ古筆脇に貼付される極札(小札)の筆跡にも近似するため、極札も合わせて並べた。

筆跡を分析すると、了伴・了悦の筆意が感じられる。了伴は「藻塩草」附属の目録「図21」をもとに、了悦は図録等に掲載される極札「図22」を比較材料として比較すると、「院」の篇(二画目)は了伴の形状に似るが、旁(とりわけ最終画)に相違が確認される。「院」の最終画の筆の運びほどちらかと言えは了悦の方が近いと言えるだろうか。

また、東京大学国文学研究室に所蔵される「古筆了悦家資料」の悉皆調査も行った「註15」。本稿では画像資料を提示できないが、了悦筆とさ



右/図 22-1 古筆了悦極札 個人蔵  
左/図 22-2 古筆了悦極札 個人蔵

れる資料を通覧すると、「見努世友」貼付の極札や各断簡の裏書の一部に見られる筆跡に近似した筆意が確認された。とりわけ、「草」や「笠」などに見られるような、横画の終筆を右下に引き下げる点画は了伴・了悦の筆に確認されるが、「笠」のように終筆をはね上げるような特徴は了悦に見られる。そのほか、多くの文字造形の特徴が了悦の筆跡に重なることが確認できた。しかし、今回の悉皆調査では十二分に比較検討できたとは言えず、本手鑑の調製に了悦が関わっていたことを断定するには不十分と言わざるを得ない。

引き続き、東京大学国文学研究室蔵「古筆了悦家資料」を丹念に精査するほか、センチュリー赤尾コレクションに伝来する了悦筆「藻塩草手鑑目録」(セコ他019)などの資料を紐解くことによつてさらなる追究ができればであろう。

以上のように、本紙裏面(紙背や裏打紙)の墨書が確認されたことによつて、詳らかになったことは多い。本稿では裏書の内容や筆跡に注目したが、多岐に見られる裏書の筆跡調査は十分とは言えない。裏書の筆と極札(小札)の筆とが一致する場面も見られるため、やはり極札の筆跡分析が重要と言えよう。極札は了伴の筆跡と考えられる箇所も多いが、十二代了悦の筆の可能性も残しつつ、今後の課題としたい。

### 結びにかえて

本稿では、古筆手鑑「見努世友」に押されている古筆切の内容に注目した。とりわけ、古筆本家十代・了伴(一七九〇—一八五三)が調製に関与しているとされる古筆手鑑「藻塩草」(京都国立博物館蔵)との連関を

考えるべく重複が見られる名物切に注目し、両手鑑に押されている古筆切の比較・検証を行った。僅かであるが連続する古筆切も確認されたことと両手鑑の連関が考えられるものの、各古筆切の伝来などが裏書に記されるわけでもなく、偶然連続した古筆切が押された可能性を否定するものではない。

また、古筆切の名称に注目し、『古筆名葉集』の類本を通覧すると、『六条切』『天龍寺切』などは、文化五年(二八〇八)版『古筆名葉集』までの諸本には名称の記載がなく、安政五年(二八五八)版『増補新撰古筆名葉集』にその名が登場する。つまり、名物切として各呼称が広く流布するのは安政五年版以降と考えられるが、古筆手鑑「藻塩草」に附属する伴の目録(弘化四年(二八四八))に「六条切」「天龍寺切」の名称が見られることから伴の頃にはそれらの呼称で知られていたと考えられることができる。なお、「六条切」は江戸時代前期に制作された古筆手鑑「翰墨城」にも押されているが、札等にはその呼称は見られない。

本稿では、斯道文庫に寄贈された古筆家の資料群(センチュリー赤尾コレクション)のうち、「古筆を極める 鑑定文化と古筆家の人々」展(慶應義塾大学付属研究所斯道文庫、慶應義塾ミュージアム・コモンズ、二〇二二年)において公開された情報をもとに「日向切」や「持明院切」について言及した。当該資料群は整理中ということで調査は叶わなかったが、古筆本家の旧蔵資料(センチュリー赤尾コレクション)の調査が進めば、さらなる解明につながることを想像に難くない。今後の調査・研究が俟たれる。また、古筆手鑑「見努世友」を中心に「三大手鑑」を取り上げて考察したが、「三大手鑑」だけでなく多くの手鑑を分析することで、これらの手鑑の位置づけにも帰依するものと考ええる。今後の課題としたい。

註1―拙稿「古筆手鑑「見努世友」について(3)――配列に見られる手鑑の特徴」(『出光美術館研究紀要』第三十号、二〇二五年三月)では、手鑑の配列に注目して、古筆手鑑「見努世友」の特徴について考察した。

註2―拙稿「古筆手鑑「見努世友」について――修復報告を中心として」(『出光美術館研究紀要』第二十七号、二〇二二年三月)。

註3―前掲註1、六一頁。

註4―『古筆手鑑大成 国宝 藻塩草』第四卷(角川書店、一九八五年)、京都国立博覧館編『国宝手鑑 藻塩草』(淡交社、二〇〇六年)など。

註5―『国宝手鑑 見ぬ世の友』(平凡社、一九七三年)、解説は是澤恭三氏の編著で、同年同社により『出光美術館選書8 見ぬ世の友』として再版される。引用は、五四頁。

註6―小松茂美監修『翰墨城 国宝手鑑』(中央公論社、一九七九年)。古筆手鑑「翰墨城」は江戸時代前期に調製されたとされるが、近代に益田孝(鈍翁、一八四八―一九三八)の手に渡り、鈍翁の手が加えられている。佐々木孝浩氏は「断片の集積体―古筆手鑑」という存在―において、「これらをすべて成立当初の姿であると考えるのは危険である」(国文学研究資料館、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所編『宗と断片 類聚と編纂の日本文化』勉誠出版、二〇一四年、四五頁)と指摘する。

また、「粟田切」については、田村悦子「古筆粟田切について―法然寺本地蔵縁起絵巻第一話の考察―」(『美術研究』第二百四十七号、一九六六年)に詳しい。

註7―武田則夫「翻刻古筆切名物」(『MUSEUM』第二百三十六号、一九七〇年十一月)。

註8―松本文子「翻刻『類葉集』と『古筆類葉集』付西尾市岩瀬文庫所蔵『明翰鈔』古筆関係部分」(『鶴見日本文学』第十二号、二〇〇七年三月)。

註9―小松茂美著『古筆学大成』巻一「古今和歌集」(講談社、一九八九年)。

註10―久曾神昇著『古筆切影印解説 I 古今集編―久曾神コレクション』(風間書房、一九九五年)。

註11―『古筆家秘書』(内閣文庫蔵、および『古筆切目安』(静嘉堂文庫蔵)は、伊井春樹編『新版 古筆名葉集』(和泉書院、一九八八年)より転載した。括弧内は朱墨の書き入れ(増補部分)が示されている。『古筆名物集』は京都市歴史資料館所蔵本を翻刻した。『類葉集(古筆類葉集)』(岡山大学蔵)および『古筆類葉集』(蓬左文庫蔵)は前掲註8松本氏論考より転載した。『古筆

名葉集』諸本は刊本をそれぞれ翻刻した。

註12—二〇二二年にセンチュリー文化財団より慶應義塾大学に寄贈された「センチュリー赤尾コレクション」には、江戸時代初期から近代に集積された古筆本家の膨大な資料や記録などがまとまっている。その一部は「古筆を極める鑑定文化と古筆家の人々」（慶應義塾大学付属研究所斯道文庫、慶應義塾ミュージアム・コモンズ、二〇二二年）において紹介された。

註13—前掲註2、裏書の中に了音、了意の極めが附属することから、「了伴以降に製作されたことが濃厚となる」と言及した。

註14—本稿で特定できなかった印（画像）をここに掲出する。



表 34 本紙より1枚目

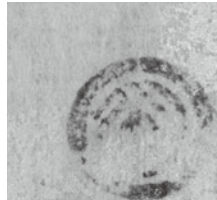


表 71 本紙より2枚目



裏 51 本紙より2枚目



表 59 本紙より2枚目



表 104 本紙より4枚目

註15—東京大学国文学研究室に伝来する「古筆了悦家資料」は、「国書データベース」(<https://kokusho.nijl.ac.jp/>)には「短冊12点・草稿類91点・来簡16点」と記されるが、東京大学OPACには「全40点の稿本・写本（元禄7年—明治期）」と記載される。今回の悉皆調査では、下記の資料を通覧した。

- 「手鑑極控」／「古筆了悦記」（一般90.4：13）
- 「極メ折紙控帳」／「古筆了悦記」（一般90.4：14：1～14）
- 群鳥蹟「内容一覧」（一般90.4：15）
- 御手鑑張順目録（一般90.4：16）
- 諸人用覚／「古筆了悦記」（近世81.8：27）
- 覺簿：明治廿七年七月吉祥日／「古筆了悦記」（近世81.8：28）

古筆手鑑「見努世友」について（4）——収載される古筆切に注目して「金子馨」

諸備忘簿：明治十二年／古筆了悦「記」（近世81.8：29）

「明治十五年一月日記」／「古筆了悦著」（近世81.8：30）

「明治八年日記」／「古筆了悦著」（近世81.8：31）

美術協會採集覚帳／古筆了悦記（近世81.8：34）

「某年三月廿九日記」（近世43.1：53）

「雜記」／「古筆了悦著」（近世43.1：54）

以上を通覧したところ、その多くがメモ的要素の多いものであるが、「極メ折紙控」（一般90.4：14：1～14）は伝称筆者名が記される点においても筆跡の比較材料として十分と言える。

また、今回の調査では右の資料群に「見努世友」に関する記載がないか通覧したが、残念ながらその名を確認することはできなかった。一群の資料には「草稿・断片・短冊類」（一般90.4：11）や「来簡」（一般90.4：11）などもあり、今後の調査が俟たれる。

なお、同資料群には了悦による自筆日記も伝来しており、了悦の鑑定記録や茶会などの記録が散見される。了悦の動向や交友関係などもうかがえる貴重な資料と言える。

#### 〔図版出典〕

図1、4、6、7、10-2、11-2、12-2 ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

図8 小松茂美監修『翰墨城 国宝手鑑』（中央公論社、一九七九年）より転載。

図15 『古筆招来・高野切・寸松庵色紙・石山切』展示図録（遠山記念館、二〇一九年）より転載。

図17、22-2 『古筆を極める 鑑定文化と古筆家の人々』（慶應義塾大学付属研究所斯道文庫、慶應義塾ミュージアム・コモンズ、二〇二二年）より転載。

図21 『古筆手鑑大成 国宝藻塩草』第四卷（角川書店、一九八五年）より転載。

図22-1 村上翠亭、高城弘一監修『古筆鑑定必携 古筆切と極札』（淡交社、二〇〇四年）より転載。

#### 〔付記〕

本稿を成すにあたり、慶應義塾大学付属研究所斯道文庫、東京大学国文学研究室においては貴重な資料の閲覧において便宜を賜りました。ここに記して篤く御礼申し上げます。

附表1 「藻塩草」「見努世友」収載古筆切対比一覧

No.	表裏順	伝称筆者	古筆切名称(名物切)	内容
16	表16	亀山院	亀山切	
15	表15	後深草院	常盤切	書状断簡
14	表14	後嵯峨院	御手判切	
13	表13	土御門院	阿波切	
12	表12	後鳥羽院	清水切	
11	表11	後鳥羽院	水無瀬切	『新古今和歌集』卷十九・神祇(1033下句)・1035詞書断簡
10	表10	後白河院	六波羅切	
9	表9	白河院	丹波切(摂津切)	『大乘起信論』(あるいは『釋摩訶衍論卷第八』)断簡
8	表8	白河院	蓮花切	
7	表7	花山院	波多切	書状断簡(異)
6	表6	嵯峨天皇	飯室切	『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』(勝鬘章第十五)断簡
5	表5	嵯峨天皇	叡山切	
4	表4	光明皇后	出雲切	
3	表3	光明皇后	鳥下絵経切	『妙法蓮華経』卷四(見宝塔品)断簡
2	表2	聖武天皇	阿弥陀院切	
1	表1	聖武天皇	大和切(大聖武)	『賢愚経』卷五(散檀摩訶品第二十九)断簡
	表裏別	伝称筆者	名称(名物切)	内容
表13	伝亀山天皇	石野切	『源氏物語』(手習)断簡	
表12	伝後深草天皇	常盤切	書状断簡	
表11	伝後鳥羽天皇	月輪色紙	後鳥羽院本「三十六歌仙歌合絵」(源順)断簡	
表10	伝後鳥羽天皇	水無瀬切	『新古今和歌集』卷十九・神祇(1037~1039)断簡	
表9	伝後白河天皇	法勝寺切	『大方廣仏華嚴経』卷十五(入不思議解脱境界普賢行願品)断簡	
表8	伝白河天皇	丹波切	『大乘起信論』(あるいは『釋摩訶衍論卷第八』)断簡	
表7	伝花山天皇	波多切	書状断簡	
表6	伝嵯峨天皇	飯室切	『金光明最勝王経註釈』卷四(最浄地陀羅尼品第六)断簡	
表5	伝光明皇后	五月一日経切	『長阿含十報法経』卷下(卷末願文)断簡	
表4	伝光明皇后		『觀世音菩薩普門品第二十五]断簡	
表3	伝光明皇后	蝶鳥下絵経切	『妙法蓮華経』卷二(譬喩品第三)断簡	
表2	伝聖武天皇	中聖武	『十誦律』卷三十四(八法中臥具法第七)断簡	
表1	伝聖武天皇	大聖武(大和切)	『賢愚経』卷二(降六師品第十四)断簡	
	小札(極札)			
	聖武天皇(大和切)			
	光明皇后(鳥之下絵切)			
	嵯峨院(飯室切)			
	嵯峨院(飯室切)			
	白川院(丹波切)			
	白川院(法輪寺切)			
	後鳥羽院(水無瀬切)			
	後鳥羽院(水無瀬切)			
	月輪色紙(繪者信實朝臣)			
	後深草院			
	後深草院			
	亀山院(石野切)			

藻塩草

見努世友

〔凡例〕  
 「藻塩草」の内容は、「見努世友」と重複する古筆切のみ、その詳細を記載した。  
 また、配列は「見努世友」の配列を基準とし、上段に「藻塩草」、下段に「見努世友」を掲載した。

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
表34	表33	表32	表31	表30	表29	表28	表27	表26	表25	表24	表23	表22	表20	表21			表18	表19	表17
邦省親王	尊良親王	恒明親王	宗尊親王	宗尊親王	後円融院	後光厳院	崇光院	光明院	光厳院	後醍醐院	花園院	後一条院	後伏見院	後伏見院			伏見院	伏見院	後宇多院
松梅院切	丹後切	伏見切	熊野切	四辻切	竹屋切	葉室切	豊後切	天龍寺切	六条切	吉野切	萩原切	藤波切	広沢切	久米切			篠村切	筑後切	松木切
「北野社法楽和歌(元徳二年)」 卷末断簡 終始	「和漢朗詠集」卷下・雑「閑居」断簡	「源氏物語」(賈木)断簡	「白氏文集」卷六「詠懐」断簡					未詳和歌集(「八代和歌抄」か)断簡	「八代和歌抄」断簡	未詳和歌集断簡	仮名書状断簡		「伏見院御集」断簡					「後撰和歌集」卷十六・雑(158)断簡	
表33	表32	表31	表30	表29	表28	表27	表26	表25	表24	表23	表22	表21	表20	表19	表18	表17	表16	表15	表14
伝邦省親王	伝尊良親王	伝恒明親王	伝宗尊親王	伝宗尊親王	伝後円融天皇	伝後光厳天皇	伝崇光天皇	伝光明天皇	伝光厳天皇	伝後醍醐天皇	伝花園天皇	伝後一条天皇	伏見天皇	伝後伏見天皇	伝後伏見天皇	伝伏見天皇	伝伏見天皇	伏見天皇	伝後宇多天皇
松梅院切	丹後切	伏見切	熊野切	日向切	巻物切	兵庫切		天龍寺切	六条切	吉野切	萩原切	坂本切	広沢切	志賀切	桂切	高倉切	細川切	筑後切	櫻井切
「北野社法楽和歌(元徳二年)」巻頭断簡	「和漢朗詠集」卷下・雑「眺望」断簡	「源氏物語」(賈木)断簡	「白氏文集」卷六「遊悟真寺詩」断簡	「古今和歌集」卷一・春上(10)断簡	「新古今和歌集」卷十二・恋二(1094)断簡	未詳和歌集(「八代和歌抄」か)断簡	「堀河院御時百首和歌」(恋)注釈断簡	未詳和歌集(「八代和歌抄」か)断簡	「八代和歌抄」断簡	未詳和歌集断簡	仮名書状断簡	「新古今和歌集」卷十六・雑上(1533~1536)断簡	「伏見院御集」断簡	「仏説阿弥陀経」断簡	「風葉和歌集」卷十・賀(710~712)	「妙法蓮華経」卷四 (授学無学人記品第九)断簡	「古今和歌集」卷一・春上(2)断簡	「拾遺和歌集」卷十八・雑(1162)断簡	未詳和歌集(定数歌か)断簡
邦省親王(松梅院切)	尊良親王(丹後切)	恒明親王(伏見切)	熊野切	宗尊親王(日向切)	後円融院	後光厳院(兵庫切)	崇光院	光明院(天龍寺切)	光厳院(六條切)	後醍醐天皇(吉野切)	花園院(萩(八ヶ)原切)	後一条院(多賀切 坂本切)	廣澤切	志賀切	後伏見院(桂切)	高倉切	堀川切	伏見院(筑後切)	後宇多院(櫻井切)

56	表 53	三条実重	但馬切	未詳縁起断簡	表 53	伝三条実重	但馬切	未詳縁起断簡	三条實重公(但馬切)
55	表 50	良 衣笠内大臣家	御文庫切	「家良百首和歌」断簡	表 52	伝藤原家良	御文庫切	「後鳥羽院定家知家人道撰歌」断簡	衣笠家良公(御文庫切)
54	表 49	二条良基	畠山切	「大慈八景詩歌」断簡(江上夕陽)	表 51	伝二条良基	畠山切	「大慈八景詩歌」断簡	二条良基公(畠山切)
53	表 48	一条内経	玄中切	「文保百首」 一条内経歌・夏日詠百首(巻頭)断簡	表 50	伝一条内経	玄中切	「文保百首」 一条内経歌・恋二十首(370～371)断簡	一条内経公(玄中切)
52	表 47	九条教家	山井切		表 49	伝九条教家	尾里切	「新古今和歌集」卷三・ 夏(273～275)断簡	教家公(尾里切)
51					表 48	伝九条道家	大覚寺切	未詳文書断簡	(大覚寺切)
50	表 46	九条道家	備中切	「新古今和歌集」卷十一・ 恋一(1064～1066)断簡	表 47	伝九条道家	備中切	「新古今和歌集」卷十四・ 恋四(1319～1321)断簡	九条道家公(備中切)
49					表 46	伝九条良経	豆色紙	「拾遺和歌集」卷十六・雜春(1056)断簡	
48	表 45	後京極良経	内侍切		表 45	伝九条良経	九条殿切	「白氏文集」卷三(新樂府(馴犀))断簡	後京極良経公(九條殿切)
47	表 44	九条兼実	中山切	「古今和歌集」卷一・ 春下(92～94詞書)断簡	表 44	伝九条兼実	中山切	「古今和歌集」卷十九・ 俳諧歌(1020～1021)断簡	月輪兼實公(中山切)
46					表 43	伝藤原忠通		書状断簡	
45	表 43	法性寺忠通	近衛殿切		表 42	伝藤原忠通	多々良切	「白氏文集」卷十七「南湖早春」断簡	法性寺忠通公(多々良切)
44	表 42	鷹司基忠	小倉切	「古今和歌集」卷五・ 秋下(282～284)断簡	表 41	伝鷹司基忠	小倉切	「古今和歌集」卷六・ 冬(315～318)断簡	鷹司基忠公(小倉切)
43	表 41	近衛道嗣	久我切	「新古今和歌集」卷八・ 哀傷(836～837詞書)断簡	表 40	伝近衛道嗣	久我切	「新古今和歌集」卷八・ 哀傷(832～833)断簡	道嗣公(久我切)
42	表 40	近衛家基	萱津切		表 39	伝近衛家基		書状断簡	家基公
41	表 39	近衛道経	高尾切	「西行物語」下断簡	表 38	伝近衛道経	高尾切	「西行物語」下断簡	近衛道経公(高尾切)
40	表 38	吉備真備	虫喰切	「成唯識實生論」卷第一 (吉備由利発願一切経)断簡	表 37	伝吉備真備	虫喰切	「悲華経」卷八(諸菩薩本授記品第四之六) (吉備由利発願一切経)断簡	吉備公
39	表 37	大職冠鎌足	多武峯切	「妙法蓮華経」卷三 (藥草論品第五)断簡	表 36	伝藤原鎌足	多武峯切	「妙法蓮華経」卷六 (常不輕菩薩品第二十)断簡	鎌足公(多武峯切)
38	表 36	四辻宮善成	細川切	「河海抄」卷一(桐壺)断簡	表 35	伝四辻善成	細川切	「河海抄」卷一断簡	四辻宮善成(細川切)
37	表 35	護良親王	播磨切	書状断簡	表 34	伝護良親王	播磨切	書状断簡	大塔宮(播磨切)

76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57
表70	表69	表67	表66	表65	表64	表63	表62	表61	表60		表59	表58	表57	表56	表55	表54	表52		表51
甘露寺資経	甘露寺光経	烏丸資任	日野俊光	園基氏	三条実任	四条隆博	中山定宗	大炊御門冬忠	飛鳥井雅有		飛鳥井雅経	花山院師賢	清水谷実秋	小倉実名	西園寺実兼	三条公忠	三条実房		松殿忠嗣
中井切	八坂切	参河切	千種切	木曾切	淡路切	八瀬切	岡崎切	和泉切	八幡切		長谷切	松尾切	若狭切	伊賀切	野宮切	西京切	堀川切		馬場切
			〔後拾遺和歌集抄〕 〔後拾遺和歌集卷十・巻頭〕断簡						〔後拾遺和歌集〕卷六・ 冬(巻末 424)断簡		〔和漢朗詠集〕卷上・春「花」断簡								〔新古今和歌集〕卷九・ 離別(885～887)断簡
			表64	表63			表62	表61	表60	表59	表58	表57	表56					表55	表54
			伝日野俊光	伝園基氏			伝中山定宗	伝大炊御門冬忠	伝飛鳥井雅有	飛鳥井雅経(伝藤原教長)	藤原教長(伝飛鳥井雅経)	伝花山院師賢	伝清水谷実秋					伝三条実冬	伝松殿実重
			千種切	間宮切			国栖切	武田切	八幡切	今城切	長谷切	佐々木切	持明院切					巻物切	馬場切
			〔後拾遺和歌集〕卷九・ 羈旅(534～535)断簡	〔純古今和歌集〕卷三・ 夏(277～279)断簡			未詳和歌集断簡	〔千五百番歌合〕春一(16～17)断簡	〔後拾遺和歌集〕卷四・ 秋上(289～290)断簡	〔古今和歌集〕卷八・離別(380～382)断簡	春「鶯」三月盡断簡	〔和漢朗詠集〕卷上・ 春「鶯」三月盡断簡	〔後拾遺和歌集〕卷一・春上(一)断簡					〔北野社壇十首和歌〕断簡	〔新古今和歌集〕卷十・ 羈旅(942～944)断簡
			日野俊光卿(千種切)	園基氏卿(間宮切)			中山定宗卿(国栖(クス)切)	大炊御門冬忠公(武田切)	雅有卿(八幡切)	今城切	飛鳥井雅経卿(長谷切)	伊師賢卿(佐々木切今城切)	清水谷実秋卿(持明院切)					三条実冬公	松殿忠嗣卿(馬場切)

96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	
		表 87	表 86	表 85	表 84	表 83	表 82	表 81	表 80		表 79	表 78	表 77	表 76	表 75	表 74	表 73	表 72	表 71	
		藤原俊成	藤原俊成	御子左俊忠	御子左忠家	南家高倉清範	六条有忠	久我長通	中院通方		久我通具	久我通親	綾小路有賴	綾小路信有	万里小路藤房	万里小路宣房	勤修寺経成	藤原光俊	甘露寺隆長	
		日野切	鳥羽切	二条殿切	仁和寺切	西山切	新宮切	安芸切	吉田切		坊門切	龍山切	村井切	藤崎切	山田切	笠置切	消息切	芝山切	周防切	
				『二十卷本類聚歌合』平定文家歌合 〔延喜五年四月廿八日〕〔初夏〕断簡				『新撰撰和歌集』卷十九・ 雑下 (1527～1528) 断簡	『新古今和歌集』卷十八・ 雑下 (1810～1811) 詞書) 断簡			『千載和歌集』卷十九・ 釈教 (1208～1210) 断簡			『因明入生理論四種相違私記』卷下 断簡	『妙法蓮華經』卷三 (葉草喩品第五) 断簡		『顯輔集』(25899～25901) 断簡		
表 78	表 77	表 76	表 75	表 74	表 73			表 72	表 71	表 70	表 69	表 68			表 67	表 66		表 65		
伝藤原俊成	伝藤原俊成・ 定家	藤原俊成	藤原俊成	伝藤原俊忠	伝藤原忠家			伝久我長通	伝中院通方	伝源通具	伝源通具	伝源通親			伝万里小路藤房	万里小路宣房		伝藤原光俊		
	志波切 (補任切)	御家切	住吉切	二条殿切	柏木切			安芸切	吉田切	山中切	秋山切	龍山切			山田切	笠置切		芝山切		
未詳和歌集 断簡	『公卿補任』(天治一年部分) 断簡	『古今和歌集』卷七・ 賀 (346～348) 断簡	『文治六年五社百首』断簡	『二十卷本類聚歌合』平定文家歌合 〔延喜五年四月廿八日〕〔巻頭〕断簡	『二十卷本類聚歌合』 〔皇太夫人班子女王歌合〕(32～33) 断簡			『新撰撰和歌集』卷十八・ 雑中 (1494～1495) 断簡	『新古今和歌集』卷十八・ 雑下 (1760～1762) 断簡	『時代不同歌合』(8左) 断簡	『拾遺和歌集』卷五・ 賀 (270～272) 断簡	『千載和歌集』卷十六・ 雑上 (966～967) 断簡			『因明入生理論四種相違私記』卷下 断簡	『妙法蓮華經』卷四 (觀持品第十三) 断簡		『顯輔集』(64～65) 断簡		
俊成卿 後鳥羽院 定家卿	俊□□定□□		俊成卿 (住吉切)	俊忠卿 (二条殿切)	御子左忠家卿 (柏木切)			久我長通公 (安藝切)	中院通方卿 (吉田切)	〈山中切〉	堀川通具卿 (秋山切)	久我通親公 (龍山切)			藤房卿 (山田切)	万里小路宣房卿 (笠置切)		藤原光俊卿 (芝山切)		

116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97
表105	表104	表103	表102	表101	表100	表99	表98	表97	表96	表95	表94	表93	表109	表92		表90	表91	表89	表88
二条為重	二条為忠	二条為明	二条為定	二条為親	二条家俊	二条為冬	二条為道	二条為藤	二条為雄	二条為兼	二条為世	二条為教	冷泉為相	二条為氏		二条為家	二条為家	藤原定家	藤原定家
道也切	高台寺切	朝倉切	冷泉切	島田切	醍醐切	小野切	西宮切	肥前切	佐和山切	長柄切	五条切	浜名切	相模切	因幡切		箱切	大原切	三首切	藤谷切
														『古今和歌集』卷十九・ 雑体俳諧歌(1017～1020)断簡			『新撰六帖題和歌』第三帖 断簡		
			表88				表87				表86		表85	表84	表83	表82	表81	表80	表79
			伝二条為定				伝二条為道				伝二条為世		伝冷泉為相	伝二条為氏	伝二条為家	伝二条為家	伝二条為家	伝藤原定家	伝藤原定家
			世保切				安田切				柴田切		結城切(勅判切)	因幡切	須磨色紙	姫路切	大原切	成就切	五首切
			『古今和歌集』卷十三・ 恋(664～668)断簡				『古今和歌集』卷十八・ 雑下(967～969)断簡				『後撰和歌集』卷十・ 恋(691～693)断簡		京極派歌合(十七番)断簡	『古今和歌集』卷六・ 冬(335～336)断簡	『古今和歌集』卷六・冬(88)断簡	『源氏若狭百番歌合』(巻頭)断簡	『新撰六帖題和歌』第五帖 断簡	『葉師瑠璃光如来本願功德経』断簡	未詳和歌集 断簡
			為定卿(世保切)				為道卿(安田切)				為世卿(柴田切)		為相卿(結城切) (後伏見院勅判)	為氏卿(因幡切)	(須磨色紙)	(姫路切)	二条為家卿(大原切)	(成就切)	定家卿(五首切)

136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117
	裏118	裏117	裏116					裏119	表117	表116	表115	表114	表113	表112	表111	表110	表108	表107	表106
	小大君	大貳三位	中将姫					八条女院	津守国夏	津守国冬	冷泉定為	冷泉慶融	冷泉源承	冷泉覺源	冷泉為邦	冷泉為秀	二条為右	二条為遠	二条為貴
	御藏切	端白切	当麻切					消息切	長尾切	伊勢切	平野切	近江切	笠間切	浦野切	入江切	三好切	豊前切	八嶋切	六角切
	『小大君集』(118～120)断簡		『称讚浄土仏撰受経』第十二断簡															『古今和歌集』卷十四・恋四(745～746)断簡	
表98	表97		表96	表95	表94	表93	表92	表91									表90	表89	
(伝藤原公任)	伝小大君		伝中将姫	伝吉備由利	伝儀子内親王	伝徽安門院	伝進子内親王	伝八条女院									伝二条為邦	伝二条為遠	
麗花集切(香紙切)	御藏切		当麻切	鞍馬切	妙満寺切	妙満寺切	妙満寺切	高倉切									入江切	八嶋切	
『麗花集』断簡	『小大君集』(80～82)断簡		『称讚浄土仏撰受経』断簡	『阿毘達磨集異門足論』卷十五(六法品第七之一)(吉備由利発願一切経)断簡	和歌懐紙(花園院法七回忌法華経要文和歌(文和三年)「妙法菩薩品」断簡)	和歌懐紙(花園院法七回忌法華経要文和歌(文和三年)「菓草喻品」断簡)	和歌懐紙(花園院法七回忌法華経要文和歌(文和三年)「妙法菩薩品」断簡)	仮名書状断簡									『詞花和歌集』卷九・雜上(349～347)断簡	『古今和歌集』卷十八・雜下(988詞書)断簡	
(麗花集切)	小大君(御藏切)		中将姫(當麻切)	吉備由利(鞍馬切)	儀子内親王(同)	徽安門院(同)	進子内親王(妙満寺切)	八条女院									為邦卿(入江切)	為遠卿(八嶋切)	



176	裏16	藤原行成	室町切			裏14	伝藤原行成	式部切	『和泉式部統集』卷下(450～452)断簡	〈式部切〉
175	裏15	藤原行成	法輪寺切			裏13	伝藤原行成	堺切	『和漢朗詠集』卷上・春「雨」断簡	行成卿〈堺切〉
174	裏13	源道濟(行成)	小堀切(針切)	『古今和歌集』卷十五・恋(800～801)、卷十八・雑下(996)断簡		裏12	伝源俊頼	大字切	『和漢朗詠集』卷上・春「鶯」、夏「首夏」断簡	
173	裏14	藤原佐理	通切			裏11	伝藤原佐理	通切	『古今和歌集』卷十七・雑下(874)断簡	
172						裏10	伝藤原佐理	筋切	『古今和歌集』卷十二・恋二(600～602)断簡	佐理卿〈筋切〉
171	裏9	小野道風	小島切	『斎宮女御集』断簡		裏9	伝小野道風	小島切	『斎宮女御集』断簡	〈小嶋切〉
170	裏10	小野道風	本阿弥切	『古今和歌集』卷十八・雑下(973～974)断簡		裏8	伝小野道風	本阿弥切	『古今和歌集』卷十八・雑下(998～999)断簡	〈本阿弥切〉
169						裏7	伝小野道風	愛知切	『仏説觀音普賢菩薩行法經』断簡	道風〈愛知切〉
168	裏8	紀貫之	高野切第二種			裏6	伝紀貫之	高野切第三種	『古今和歌集』卷十九・俳諧歌(1032～1033)断簡	貫之〈高野切〉
167	裏7	菅原道真	式切							
166	裏6	菅原道真	讃岐切							
165	裏5	菅原道真	河内切	『金光明最勝王經』卷八(卷末)断簡		裏5	伝菅原道真	河内切	『大方廣仏華嚴經』卷六十七(入法界品第三十九之八)断簡	菅公〈河内切/俗二紫切卜云〉河内切
164	裏4	小野篁	山門切	『弘明集』卷二十二「難陀禪神滅論」断簡		裏4	伝小野篁	山門切	『弘明集』卷二十二「三藏聖教序」断簡	小野篁〈山門切〉
163	裏3	橘逸勢	石山切							
162	裏2	朝野魚養	御室切	『大智度論釋初品中檀波羅蜜法施之餘』卷第十一断簡		裏3	伝朝野魚養	御室切	『大方廣仏華嚴經』卷二十二(金剛幢菩薩十迴向品第二十一之九)断簡	魚養
161						裏2	伝聖德太子	法隆寺切	『中論疏記』卷一・『妙法蓮華經』卷二(譬喻品第三)断簡	法隆寺切
160	裏1	聖德太子	戸隠切(宝塔切)	『妙法蓮華經』卷四(法師品第十七)断簡		裏1	伝聖德太子	戸隠切(宝塔切)	『法華義疏』卷三(信解品第四)断簡	聖德太子〈戸隠切〉
159	裏115	今川了俊	伊予切	『源氏物語』(夕顔)卷末断簡		表117	今川了俊	伊予切	『源氏物語』(夕顔)断簡	今川了俊〈伊与切〉
158	裏114	足利尊氏	北山切	『新古今和歌集』卷四・秋上(337～338)断簡		表116	伝足利尊氏	北山切	『新古今和歌集』卷四・秋上(376～377)断簡	尊氏公〈北山切〉
157	裏113	新田義貞	三室切			表115	伝新田義貞	菊池切	『古今和歌集』卷十四・恋四(721～725)断簡	新田義貞〈菊池切〉

196	裏30	源家長	天王寺切	『仮名聖徳太子伝暦』断簡	裏33	伝源家長	天王寺切	『仮名聖徳太子伝暦』断簡	源家長〈天王寺切〉
195	裏29	藤原秀能	三宅切	『新勅撰和歌集』卷九・神祇(540)断簡	裏32	伝藤原秀能	三宅切	『新勅撰和歌集』卷九・神祇(561～562)断簡	大屋秀能朝臣〈三宅切〉
194	裏28	鴨長明	土佐切						
193	表68	藤原信実	栗田切	『法然寺地藏縁起絵巻(地藏験記絵巻)』(詞書)断簡 c bは翰墨城	裏31	伝藤原信実	栗田切	『法然寺地藏縁起絵巻(地藏験記絵巻)』(詞書)断簡 a	藤原信實朝臣〈栗田切〉
192	裏27	源有家	多田切	『新古今和歌集』卷六・冬(565～567)断簡	裏30	伝藤原有家	多田切	『新古今和歌集』卷六・冬(688～690)断簡	藤原有家卿〈多田切〉
191	裏26	壬生家隆	升底切	『金葉和歌集』卷三・秋(188～189)断簡	裏29	伝藤原家隆	升底切	『金葉和歌集』卷二・夏(95～96)断簡	壬生家隆卿〈升底切〉
190	裏25	藤原清輔	内裏切	清輔本『古今和歌集』卷十八・雑下(960～964)断簡	裏28	伝藤原清輔	内裏切	清輔本『古今和歌集』卷八・離別(365～367)断簡	藤原清輔卿〈内裏切〉
189	裏24	藤原顕輔	鶉切	『古今和歌集』卷十六・哀傷歌(349)断簡	裏27	伝藤原顕輔	鶉切	『古今和歌集』卷十九・俳諧歌(1051～1054)断簡	藤原顕輔卿〈鶉切〉
188	裏23	藤原基俊	山名切	『新撰朗詠集』卷上・九月尽断簡	裏26	藤原基俊 (伝藤原公任)	山名切	『新撰朗詠集』卷下・雑「文詞付遺文」断簡	〈山名切〉
187					裏25	藤原基俊	多賀切	『和漢朗詠集』卷下・雑「鴨」(429～452)断簡	藤原基俊卿〈多賀切〉
186	裏22	源俊頼	東大寺切	『三宝絵』卷中「役行者」断簡	裏24	伝源俊頼	東大寺切	『三宝絵』卷中「役行者」断簡	〈東大寺切〉
185	裏21	源俊房	黒谷切		裏23	伝源俊頼	尼崎切	尼崎本『万葉集』卷十二(3004～3005)断簡	源俊頼朝臣〈尼崎切〉
184	裏20	源兼行	初瀬切		裏22	伝源兼行	西大寺切	『上宮聖徳法王帝説』断簡	源兼行〈西大寺切〉
183					裏21	伝藤原定頼	津田切	『妙法蓮華経』卷二(譬喩品第三)断簡	〈津田切〉
182					裏20	伝藤原定頼	烏丸切	『後撰和歌集』卷八・冬(465～469)断簡	藤原定頼卿〈烏丸切〉
181	裏19	藤原定頼	烏丸切	『後撰和歌集』卷五・秋上(219～222)断簡	裏19	伝藤原定頼	右近切(烏丸切)	『後撰和歌集』卷二・春(48～51)断簡	〈右近切〉
180	裏18	四条公任	大内切		裏18	伝藤原公任	堺色紙	『古今和歌集』卷十一・恋一(47)断簡	〈堺色紙〉
179	裏17	四条公任	岡寺切		裏17	伝藤原公任 俊頼(伝西行)	糟色紙 (後拾遺集切 粽切)	『後拾遺和歌集(抄出)』卷九・羈旅(512)断簡	公任卿〈糟色紙〉
178	裏12	源順	難波切	元暦校本『万葉集』卷十四(3567)断簡	裏16	伝源順	有栖川切(難波切)	元暦校本『万葉集』卷十四(3568～3549)断簡	〈難波切〉
177	裏11	源順	栞尾切(鎌倉切)	桂宮本『万葉集』卷八(1424～1425)断簡	裏15	伝源順	栞尾切(鎌倉切)	桂宮本『万葉集』卷四(652)断簡	源順〈鎌倉切〉

216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197
裏44	裏43	裏42	裏38			裏41	裏40	裏39	裏37			裏36		裏35	裏34	裏33	裏32	裏31	
親王 仁和寺法守法	世尊寺行俊	世尊寺行忠	世尊寺行房			世尊寺行尹	世尊寺行尹	世尊寺定成	世尊寺経尹			世尊寺経朝		世尊寺行能	藤原伊経	藤原伊経	藤原定実	洞院公実	
榎尾切(菩提院切)	長門切	淀切	下野切			高島切	七社切	田原切	那智切			玉津切		藤井切	久世切	尼子切	粉河切	三善切	
未詳和譜断簡	『平家物語』卷上「文寛」断簡		『拾遺和歌集』卷十・ 神楽歌(600～602)断簡						『因明人正理論疏』卷下断簡			『蜻蛉日記』卷上断簡			『万葉集(抄出)』(387)断簡		『弘法大師伝絵卷』(卷五詞書)断簡		
裏51	裏50	裏49	裏48	裏47	裏46	裏45	裏44	裏43	裏42	裏41	裏40	裏39	裏38	裏37	裏36		裏35		裏34
伝法守法親王	伝藤原行俊	伝藤原行忠	伝藤原行房	伝藤原行房	伝藤原行尹	伝藤原行尹	伝藤原行尹	伝藤原定成	伝藤原経尹	伝藤原経朝	伝藤原経朝	伝藤原経朝	伝藤原行能	伝藤原行能	伝藤原伊経		伝藤原定実		伝源家長
菩提院切(榎尾切)	長門切		下野切			安土切	安土切	佐介切	那智切	天野切	玉津切	三条切	宇治切	久世切		粉河切		龍田切(立田切)	
未詳和譜断簡	『源平盛衰記』卷二十七「源氏追討祈事」断簡	『古今和歌集』卷九・羈旅(413)断簡	賀(294～296)断簡	『拾遺和歌集』卷五・ 賀(294～296)断簡	『新古今和歌集』卷四・秋(380)断簡	『仮名法華經』「方便品」(第二)断簡	『新撰朗詠集(抄出)』卷下・雜「山寺」(543)断簡	『新撰朗詠集(抄出)』卷下・雜「山寺」(550)断簡	『因明人正理論疏』卷下断簡	『後拾遺和歌集』卷三・夏(214)断簡	未詳文書断簡	『蜻蛉日記』卷上断簡	夏「納涼」(163～167)断簡	『新古今和歌集』卷一・ 春上(30～32)断簡	『万葉集(抄出)』(1101・1106)断簡		『弘法大師伝絵卷』(詞書)断簡		『和漢朗詠集』卷下・ 雜「仙家」(542)断簡
仁和寺法守親王(菩提院切)	行俊卿	行忠卿	〈下野切〉	行房卿			行尹卿(安土切)	定成卿(佐介切)	経尹卿(那智切)		〈天野切〉	経朝卿(玉津切)	〈三条切〉	行能卿(宇治切)	伊経朝臣(久世切)		世尊寺定實朝臣 (粉河粉河切)		立(龍)田切

236	裏57 聖宝 (理源大師)	三宝山院切	魚山声明断簡	裏70 伝聖宝(理源大師)	三宝山院切	魚山声明断簡	醍醐聖宝僧正(三宝山院切)
235	裏56 円珍 (智証大師)	竹生島切	『四分律行事鈔資持記』卷下断簡	裏69 伝円珍(智証大師)	三井寺切	未詳仏典断簡	智証大師(三井寺切)
234	裏55 道昌 (慈覚大師)	嵯峨切	『四分律行事鈔資持記』卷下断簡	裏68 伝道昌 大師	嵯峨切	『四分律行事鈔資持記』卷上「説戒正義篇」(第十七)断簡	道昌律師(嵯峨切)
233	裏54 円仁 (慈覚大師)	西塔切		裏67 伝円仁(慈覚大師)	無動寺切	『羯磨一卷』(出曇無德律)断簡	慈覚大師(無動寺切)
232				裏66 伝空海(弘法大師)	鼠跡心経	『般若波羅蜜多心経』	
231	裏53 空海 (弘法大師)	南院切	『新撰類林抄』断簡	裏65 伝空海(弘法大師)	南院切	『新撰類林抄』断簡	弘法大師(南院切)
230	裏52 最澄 (伝教大師)	焼切	『大般若波羅蜜多経』卷五十二(初分弁大乘品第十五之二)断簡	裏64 伝最澄(伝教大師)	焼切	『大般若波羅蜜多経』卷四百二十二(第二分無邊際品第二十三之三)断簡	傳教大師(焼切)
229				裏63 伝巖叡僧正		書状断簡	随心院巖叡僧正
228	裏51 親王 青蓮院道円法親王	祇園切		裏62 伝道円法親王	上田切	未詳仏典断簡	道円親王(上田切)
227	裏50 王 青蓮院祐助親王	龜山切	未詳仏典断簡	裏61 伝祐助親王	龜山切	未詳仏典断簡	祐助親王(龜山切)
226	裏49 親王 青蓮院尊道法親王	卷物切	往来物断簡	裏60 伝尊道法親王		往来物断簡	尊道親王
225				裏59 伝尊道法親王		『古今和歌集』抄出』卷二・春(74)断簡	
224	裏48 親王 青蓮院尊円法親王	能瀬切		裏58 伝尊円法親王		往来物断簡	
223	裏47 親王 青蓮院尊円法親王	卷物切	『小野道風請状』写断簡	裏57 伝尊円法親王		『古今和歌集』序収載歌断簡	尊圓親王
222	裏46 親王 青蓮院尊円法親王	金沢切		裏56 伝慈道法親王		書状断簡	青蓮院慈道親王
221				裏55 伝道覚法親王		書状断簡	青蓮院道覚親王
220				裏54 伝慈円	丸山切	『新古今和歌集』卷二十・哀傷(1301~1303)断簡	慈鎮和尚(丸山切)
219	裏79 慈鎮(慈円)	丸山切	『新古今和歌集』卷十四・恋四(1263~1266)断簡	裏53 伝免仁法親王	大仏切	『古今和歌集』卷十八・雑下(970)断簡	妙法院免仁親王(大佛切)
218	裏45 親王 妙法院堯仁法親王	喜多切		裏52 伝守覚法親王	木寺切	『大乗金剛不空真実三摩耶経』(般若波羅蜜多理趣品)断簡	守覚親王(木寺切)

256	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237
裏73		裏72	裏71			裏70		裏69	裏68	裏67	裏66	裏65	裏64	裏63	裏62	裏61	裏60	裏59	裏58
寂然		寂蓮	文覚			西行		太秦頭昭	覚明	重源	俊寛	忠快	覚猷 (鳥羽備正)	登蓮	根来覚鏹	行尊	源信 (恵心僧都)	性空 (書写上人)	良源(慈恵・元三大師)
村雲切		衛門切(右衛門切)	消息切			月輪切 (御裳濯川切)		賀茂切	飛騨切	奈良切(五輪塔切)	三輪切	由良切	壬生切	葛城切	紀伊国切	南坊切	坂戸切	浅野切	横川切(山上切)
『實之集』卷七(20～22)断簡		『詞花和歌集』卷八・離別(396)断簡	仮名書状断簡					『古今和歌集』卷五・秋下(277～278)断簡						『大方広華嚴經』卷二十七(十地品第二十二之五)断簡		未詳仏典断簡		書状断簡	『華嚴經』(行願品)断簡
裏86	裏85	裏84	裏83	裏82	裏81	裏80	裏79	裏78		裏77	裏76			裏75		裏74	裏73	裏72	裏71
伝寂然	伝寂蓮	伝寂蓮	伝文覚	伝文覚	伝西行	伝西行	伝太秦頭昭	伝太秦頭昭		伝重源	伝俊寛			伝登蓮		伝行尊	伝源信(恵心僧都)	伝性空(書写上人)	伝・良源(慈恵・元三大師)
村雲切	佐野切	右衛門類切		高山切	針屋切(五首切)	白川切	建仁寺切	賀茂切		水谷切				葛城切		南坊切	安楽院切	浅野切	山上切(横川切)
『實之集』卷一(127～129)断簡	『治承二年三月十五日権禰宜重保別雷社歌合』断簡	『詞花和歌集』卷七・恋上(223～234)断簡	仮名書状断簡	『仏説観普賢菩薩行法経』断簡	『治承二年右大臣家百首』断簡	『後撰和歌集』卷五・秋上(222～223)断簡	『源氏物語积』断簡	『古今和歌集』卷八・離別(388～389)断簡		文書(東大寺勸進所裁許)断簡	『後撰和歌集』卷十六・雜一(133～136)断簡			『大方広華嚴經』卷二十七(十地品第二十二之五)断簡		未詳仏典断簡	『明本抄』第二、『因明大疏抄』卷二十四断簡	書状(二通)断簡	『妙法蓮華経』卷二(信解品第四)断簡
寂然(定家卿加筆 村雲切)	寂蓮法師(右衛門切)	寂蓮法師(右衛門切)		文覚上人(高山切)	針屋切	西行法師(白川切)	建仁寺切	奏頭昭(加茂切)		俊乗坊重源	俊寛僧都(水谷切)			登蓮法師(葛城切)		圓満院行尊備正(南坊切)	恵心僧都(安楽院切)	書写山性空上人(浅野切)	元三大師(山上切)



289	288	287	286	285	284	283	282	281	280	279	278	277
		裏99		裏98	裏97 兼好	裏96		裏95	裏94 夢窓疎石	裏93 虎関師鍊	裏92 玄恵	裏91 宗峰妙超 (大灯国師)
		慶運		浄弁	兼好	頓阿		良憲	夢窓疎石	虎関師鍊	玄恵	宗峰妙超 (大灯国師)
		雁金切		松花集切	越前切	草庵集切		尾沢切	三浦色紙	卷物切	伯耆切	佐保切
				〔松花和歌集〕断簡	〔伊勢物語〕(43段)断簡	〔頓阿法師詠〕断簡						
裏112	裏111	裏110	裏109	裏108	裏107	裏106	裏105				裏104	
筆者未詳	伝兼空	伝慶運	伝浄弁	伝浄弁	伝兼好	伝頓阿	伝耕雲				伝玄恵	
	下田屋切			松花集切	越前切	草庵集切					北条切	
未詳卷物(奥書)断簡	〔松花和歌集〕卷一・春(8~11)断簡	〔拾遺現藻和歌集〕断簡	〔新古今和歌集〕卷三 〔夏〕(282~284番歌)断簡	〔松花和歌集〕断簡	〔伊勢物語〕(41~42段)断簡	〔頓阿法師詠〕(288~291)断簡	耕雲本『源氏物語』(蛩)断簡				未詳詩歌合断簡	
	兼空上人(下田屋)	慶運法師		浄辨律師(松花集切)	兼好法師(越前切)	頓阿法師(草庵集切)	耕雲軒明魏				玄恵法印(北条切)	

附表2 「見努世友」 収載古筆切裏書（墨書） 一覧

配列	伝称筆者	名称（名物切）	小札（極札）	裏書き（詳細）
表1	伝聖武天皇	大聖武（大和切）	聖武天皇（大和切）	①丁巳七／①聖武
表4	伝光明皇后			②光明 宗／辛未九
表7	伝花山天皇	波多切	花山院（波多切）	①五〇／②花山院宸翰（〇〇〇〇／了音札）
表8	伝白河天皇	丹波切	白川院（丹波切）	①白川院
表9	伝後白河天皇	法勝寺切	後白川院（法輪寺切）	②後白川
表10	伝後鳥羽天皇	水無瀬切	後鳥羽院（水無瀬切）	②印（割印「関？」、壺型印「廣」、後鳥羽院 札有（牛庵／了音） ③後鳥羽
表12	伝後深草天皇	常盤切	後深草院	①（八十八代）後深草院（久仁 冨小路院／常盤井院）／後嵯峨院第三子、後深草院
表15	伏見天皇	筑後切	伏見院（筑後切）	②（九十一代）伏見院 熙仁 正應永仁 拾遺ノ切／壬午六
表16	伝伏見天皇	細川切	（堀川切）	④（丑壬八）伏見院／伏見院
表17	伝伏見天皇	高倉切	（高倉切）	①伏見院／久平へ
表18	伝後伏見天皇	桂切	後伏見院（桂切）	①（集不知作者也）／風葉集／後伏見院
表20	伏見天皇	広沢切	（廣澤切）	②後伏見院 詠草切／百首之切
表21	伝後二条天皇	坂本切	後二条院（多賀切 坂本切）	②後二条院、③後二条
表24	伝光厳天皇	六条切	光厳院（六條切）	②「九十六／百番」／さやかにも哥拾遺悪筆／棹姫の哥續古今集（續古今之異本か）／光厳院（了音ノ極アリ）
表25	伝光明天皇	天龍寺切	光明院（天龍寺切）	②光明院（〇〇〇下）續千載哥ナトモアリ／集不知ト相見間此切ニ能似カ
表26	伝崇光天皇		崇光院	①崇光院、墨印（浅井不舊）、②崇光院（集不知哥ノ注書タル物也／恋をのみ哥千載集恋三ニアリ）

《凡例》

古筆切の裏面に墨書されているもののみ一覧に示し、裏書きの内容を記した。  
 本紙裏は①、裏打ち紙に裏書きが確認できる場合は、本紙に近い順に①②③④とあらわした。  
 ミセケチやスリケシは（ ）内、割書き・小書きは（ ）内、貼り紙は「 」内、朱書きは（ ）内に示し、長文の場合は改行を「」で示した。判読不明な箇所は□であらわした。

表 59	表 58	表 57	表 56	表 55	表 54	表 53	表 52	表 47	表 43	表 41	表 40	表 39	表 37	表 35	表 34	表 33	表 30	表 29	表 27
(伝 飛鳥井雅経) 藤原教長	(伝 飛鳥井雅経) 藤原教長	伝 花山院師賢	伝 清水谷実秋	伝 三条実冬	伝 松殿実重	伝 三条実重	伝 藤原家良	伝 九条道家	伝 藤原忠通	伝 鷹司基忠	伝 近衛道嗣	伝 近衛家基	伝 吉備真備	伝 四辻善成	伝 護良親王	伝 邦省親王	伝 宗尊親王	伝 宗尊親王	伝 後光厳天皇
今城切	長谷切	佐々木切	持明院切	巻物切	馬場切	但馬切	御文庫切	備中切		小倉切	久我切		虫喰切	細川切	播磨切	松梅院切	熊野切	日向切	兵庫切
(今城切)	飛鳥井雅経卿(長谷切)	尹師賢卿(佐々木切今城切)	清水谷実秋卿(持明院切)	三条実冬公	松殿忠嗣卿(馬場切)	三条実重公(但馬切)	衣笠家良公(御文庫切)	九条道家公(備中切)		鷹司基忠公(小倉切)	道嗣公(久我切)	家基公	吉備公	四辻宮善成(細川切)	大塔宮(播磨切)	邦看親王(松梅院切)	(熊野切)	宗尊親王(日向切)	後光厳院(兵庫切)
② 飛鳥井祖雅経卿 / 古今離別、花押、印二種(不明)	① 雅経、和漢朗詠集切 / 雅経	① 師賢	③ 清水谷殿実秋卿	① 紙背文書か	① 松殿忠嗣	① 実重	③ 衣笠内大臣家良公	① 道家公 / 新古今恋之四(了音之極アリ)、ろ十七	① 紙背あり、③ 忠通公(法性寺殿) 外題有	① 鷹司基忠(了音札)	③ 近衛道嗣公 / 定成 / 新古今(哀傷切)、豎一寸モ長キアリ	③ 家基	② 吉備	③ 四辻宮善成公 札有	① 印(不明)、① 大塔宮尊雲 / 文切、印(不明)	① 印(不明)	① 宗尊親王(了音極類切 / 万葉切)、印(不明)	① 宗尊	① 後光厳院(續古今異本)

表 86	表 85	表 84	表 82	表 80	表 79	表 76	表 74	表 73	表 72	表 71	表 70	表 68	表 67	表 64	表 63	表 62	表 61	表 60
伝二条為世	伝冷泉為相	伝二条為氏	伝二条為家	伝藤原定家	伝藤原定家	藤原俊成	伝藤原俊忠	伝藤原忠家	伝久我長通	伝中院通方	伝源通具	伝源通親	伝万里小路藤房	伝日野俊光	伝園基氏	伝中山定宗	伝大炊御門冬忠	伝飛鳥井雅有
柴田切	結城切(勅判切)	因幡切	姫路切	成就切	五首切	御家切	二条殿切	柏木切	安芸切	吉田切	山中切	龍山切	山田切	千種切	間宮切	国栖切	武田切	八幡切
為世卿(柴田切)	為相卿(結城切) 後伏見院勅判	為氏卿(因幡切)	(姫路切)	(成就切)	定家卿(五首切)		俊忠卿(二条殿切)	御子左忠家卿(柏木切)	久我長通公(安藝切)	中院通方卿(吉田切)	(山中切)	久我通親公(龍山切)	藤房卿(山田切)	日野俊光卿(千種切)	園基氏卿(間宮切)	中山定宗卿(國栖(クス)切)	大炊御門冬忠公(武田切)	雅有卿(八幡切)
③為世	①冷泉為相卿/後伏見院判詞右哥心	①二条家為氏因幡切也	②(箔切) 姫路切/為家/百番哥合(源氏/狭衣) 哥	②遊行上人、(二代□□□)	②庚辰四、印(不明)	①俊成/古今(寛)	②俊忠哥二首、印(不明)	④忠家 俊忠 俊成 定家 為家也/了音札	②長通 文を/新後撰集(雑中)/長通者邑上源氏也具平親王孫中院祖六條右大臣顯房五世孫内大臣通親公男久我祖/太政大臣通光公五代正嫡也父左大臣通雄公母源仲基女也蓋長通号後中院又千種/叙従一位(曆應三年)任太政大臣俊光殿帝之文和二年薨行年七十四	②中院通方卿(新古今切)/久我通親にては貴之候、印(不明)	①みちとも	③久我通親公	①藤房	①日野俊光 後拾遺集(羈旅切)/了意極アリ	④四十三、印(正好)、②□□/園殿基氏卿/續古今(寛)、能ク似クル切も後撰集アリ/哥二行書/此出来より少シ文字ホソシ	②中山定宗	③冬忠(大炊御門)/哥合未考	②雅有(後拾遺(春) 秋上)

表 117	今川了俊	伊予切	今川了俊 (伊与切)	①今川了俊、③今川了俊 (有極)、源氏物語注 (自筆奥書アリ / 伊与切)
表 116	伝足利尊氏	北山切	尊氏公 (北山切)	③新古今 (秋上) / 尊氏公
表 115	伝新田義貞	菊池切	新田義貞 (菊池切)	③新田義貞 (古今恋四) / 仲極
表 111	伝平兼兼	春日切	平兼朝臣 (春日切)	②兼兼、独りゆるノ哥新古今集 (雑上) 花山院御 / 花山院御集歌可考、印 (不明)
表 110	伝平忠度	進藤切	平忠度朝臣 (進藤切)	①平忠度 / 金葉集 (春上)
表 104	伝千代能	宇都宮切	千代能 (宇都宮切)	④慶愛寺開山無著如大禪師 將軍尊氏公御姨 印 (不明)、了音札、天藤自の □□□
表 103	伝阿仏尼	秋田切 (鯉切)	阿佛尼 (鯉下繪秋田切)	②阿佛 / 古今集 (春下)
表 102	伝民部卿局	秋篠切	民部卿局 (秋篠切)	②民部卿、民部卿局 (定家卿女、了音極ノ類、民部卿局、後撰集 (雑四))
表 101	伝越部局	阿野切	越部局 (阿野切)	①越部局 (俊成卿女)、古今 (春上)
表 100	伝坊門局	小松切	坊門局 (玄田切小松切)	①坊門局
表 99	伝二位尼 (北条政子)		二位尼	①二位尼 / まさ子
表 98	伝藤原公任 (伝小大君)	麗花集切 (香紙切)	麗花集切	③辰二、④小大君、麗花集切、公任卿卜了栄極アリ猶可考
表 96	伝中将姫	当麻切	中将姫 (當麻切)	①中将姫
表 95	伝吉備由利	鞍馬切	吉備由利 (鞍馬切)	①由利大臣
表 94	伝儀子内親王	妙満寺切	儀子内親王 (同)	②儀子内親王 (花園院皇女)
表 93	伝徽安門院	妙満寺切	徽安門院 (同)	②徽安門院 (花園院皇女)
表 92	伝進子内親王	妙満寺切	進子内親王 (妙満寺切)	②進子内親王 (後伏見院皇女)
表 90	伝二条為邦	入江切	為邦卿 (入江切)	②為遠 / 為邦ト牛庵極アリ (可定、為定子 / 詞花集切 (雑上部))
表 89	伝二条為遠	八嶋切	為遠卿 (八嶋切)	③為遠卿申七
表 87	伝二条為道	安田切	為道卿 (安田切)	①花押 (不明)、②為道 / 古今 (雑下)

裏35	裏32	裏30	裏27	裏26	裏24	裏23	裏20	裏19	裏18	裏17	裏15	裏13	裏12	裏9	裏8	裏6	裏4	裏3	裏2
伝藤原定実	伝藤原秀能	伝藤原有家	伝藤原顕輔	藤原基俊 (伝藤原公任)	伝源俊頼	伝源俊頼	伝藤原定頼	伝藤原定頼	伝藤原公任	伝藤原公任 (伝源俊頼、伝西行)	伝源順	伝藤原行成	伝源俊頼	伝小野道風	伝小野道風	伝紀貫之	伝小野篁	伝朝野魚養	伝聖徳太子
粉河切	三宅切	多田切	鶉切	山名切	東大寺切	尼崎切	烏丸切	右近切(烏丸切)	堺色紙	糟色紙(後拾遺集切、 粽切)	桐尾切(鎌倉切)	堺切	大字切	小島切	本阿弥切	高野切第三種	山門切	御室切	法隆寺切
世尊寺定實朝臣(粉河粉河切)	大屋秀能朝臣(三宅切)	藤原有家卿(多田切)	藤原顕輔卿(鶉切)	(山名切)	(東大寺切)	源俊頼朝臣(尼崎切)	藤原定頼卿(烏丸切)	(右近切)	(堺色紙)	公任卿(糟色紙)	源順(鎌倉切)	行成卿(堺切)		(小嶋切)	(本阿弥切)	貫之(高野切)	小野篁(山門切)	魚養	法隆寺切
②□□	②藤原秀能朝臣(新勅撰/神祇之切)朝倉茂入極、藤原左兵衛尉大夫出羽守從五位上 京方/追手大将乱後始熊野出家法名如願/以和哥徳□命仁治元年五月廿一日卒/五十七才 秀康弟 河内守秀宗子	①大藏卿有家(新古今集、印(不明))	①古今(俳諧、左京大夫顕輔(村に)印(極札写))	②丑五、③(藤原)基俊(了音類切)和漢朗詠集(公任筆)、(百人一首之内)契おきし、從五位基俊、印(不明)、(從五位下左衛門佐基俊朝臣)法名覺舜/保延出家(八十四才)	①俊頼/東大寺切/縁起ナリ、印(澤)	④万葉集切(白川切大治二年金葉集撰者俊頼(大工頭四位/大納言經信子))	①後撰集(冬切)、(世尊寺行成卿)定頼也 了音極類/印(不明)	①印(不明)、②公任卿/後撰集(春中切)	②公任	①信□還/了(横書了信力)、今にはかりかすまさらなむ/あかてゆくみやこの山を/栗□とたにみむ/公任卿色紙探幽斎/写有之/大切物也/増基後撰/入此哥八/後拾遺二入	②宗□□	③(五)行成	①印(不明)	②(道風)	②道風(本阿弥切/古今集)了延極、書五十三	①貫之	①割印(不明)、③小野篁、白	①魚養、①魚養	②未二

裏63	裏62	裏61	裏60	裏59	裏56	裏55	裏54	裏53	裏52	裏51	裏50	裏49	裏48	裏46	裏43	裏42	裏41	裏39	裏38
伝巖叡僧正	伝道円法親王	伝祐助親王	伝尊道法親王	伝尊道法親王	伝慈道法親王	伝道覚法親王	伝慈円	伝堯仁法親王	伝守覚法親王	伝法守法親王	伝藤原行俊	伝藤原行忠	伝藤原行房	伝藤原行尹	伝藤原定成	伝藤原経尹	伝藤原経朝	伝藤原経朝	伝藤原行能
	上田切	龜山切					丸山切	大仏切	木寺切	菩提院切(檀尾切)	長門切		下野切		佐介切	那智切		玉津切	三条切
随心院巖叡僧正	道圓親王(上田切)	祐助親王(龜山切)		尊道親王	青蓮院慈道親王	青蓮院道覚親王	慈鎮和尚(丸山切)	妙法院堯仁親王(大佛切)	守覚親王(木寺切)	仁和寺法守親王(菩提院切)	行俊卿	行忠卿	(下野切)		定成卿(佐介切)	経尹卿(那智切)		経朝卿(玉津切)	(三条切)
② 随心院僧正(二條関白左大臣従一位師良公御子/巖叡、了仲極アリ)、□□内丙子霜	② 割印(不明)、印(□道)	① 天台座主祐助親王、七十二	② 尊道	③ 尊道 青蓮院(了音札)	③ 慈道 戊寅八	① 紙背文書あり、① 青蓮院道覚、印(徳)	② 慈鎮、③ 慈鎮(拾遺集 哀傷切)、印(不明)、了音極アリ	② 古今集(雑下)、如法院、堯仁親王	① 仁和寺/守覚	② 仁和寺/法守、印(不明)	② 世尊寺□、行俊	② 世尊寺行忠卿、古今集(霧旅)	② 世尊寺行房卿/拾遺集(賀)、九十二	① 行尹、割印(不明)	① □延ノ極アリ(了延力)	① 印、② 経尹	② 経朝	② 世尊寺行尹卿/了音ノ極アリ	① 行能

裏94	裏92	裏90	裏88	裏87	裏86	裏85	裏84	裏83	裏82	裏79	裏77	裏76	裏75	裏74	裏73	裏72	裏69	裏67	裏65
伝高弁(明恵)	伝貞慶	伝蓮生(熊谷直実)	伝寂念	伝寂超	伝寂然	伝寂蓮	伝寂蓮	伝文覚	伝文覚	伝太秦顕昭	伝重源	伝俊寛	伝登蓮	伝行尊	伝源信(恵心僧都)	伝性空(書写上人)	伝円珍(智証大師)	伝円仁(慈覚大師)	伝空海(弘法大師)
博多切	石井切		松本切	大富切	村雲切	佐野切	右衛門類切		高山切	建仁寺切		水谷切	葛城切	南坊切	安楽院切	浅野切	三井寺切	無動寺切	南院切
〈博多切〉	解脱上人(石井切)	〈宇津宮〉蓮生(性)法師	寂念法師(松本切)	寂超(大富切)	寂然(定家卿加筆/村雲切)	〈佐野切〉	寂蓮法師(右衛門切)		文覚上人(高山切)	〈建仁寺切〉	俊乗坊重源	俊寛僧都(水谷切)	登蓮法師(葛城切)	圓滿院行尊僧正(南坊切)	恵心僧都(安楽院切)	書写山性空上人(浅野切)	智證大師(三井寺切)	慈覚大師(無動寺切)	弘法大師(南院切)
③方二	①けたつ上人、②解脱上人	①□□開堂法	①寂然法師(後拾遺雜一切)	②十五、③寂超	①寂然(貫之家集切)	③寂蓮	②詞花集ノ内、寂蓮	②文覚上人(了珉札)	②文覚上人	③大秦顕昭(了音極札)	③俊乗坊澄玄	②俊寛(了意極アリ)／後撰(雜二)、印(不明)	①登蓮□	②行尊大僧正(了音極メ類)	③恵心僧都	①版経二種(生貧着…、願時賜…)	①紙背仏典注釈あり(也彌思合反…)、①智證大師	②慈慧也(了雪二見ゆる)、割印(不明)	①下絵(桜)

裏 110	裏 109	裏 108	裏 106	裏 105	裏 104	裏 102	裏 98
伝慶蓮	伝浄弁	伝浄弁 (松花集切)	伝頓阿 (草庵集切)	伝耕雲	伝玄恵 (北条切)	伝日蓮 (聖教切)	道元 (道正庵切)
慶蓮法師		浄辨律師 (松花集切)	頓阿法師 (草庵集切)	耕雲軒明魏	玄恵法印 (北条切)	日蓮上人	道元禪師 (道正庵切)
① 四天皇之内慶蓮了音札、② 慶蓮法印了音札	② 浄弁	③ 浄弁、松花和哥集切、「いせ」	③ 割印(不明)	② 耕雲了哥書奥書、割印(不明)	② 玄恵法印	① 是□	① 對大己闍梨法、第五

On *Kohitsu Tekagami* (Album of Exemplary Calligraphy Fragments)“*Minuyo-no-Tomo*” (4)

## — Focusing on the Included Calligraphy Fragments

KANEKO, Kaoru

The album of ancient exemplary calligraphy fragments “*Minuyo-no-Tomo*” (National Treasure), in the collection of the Idemitsu Museum of Arts, is a standard reference book for the Kohitsu-ke (literally meaning, ‘ancient calligraphy family’), the notable family of calligraphy connoisseurs, whose business was appraising ancient calligraphy during the Edo period. It is considered as one of the “Three *Kohitsu Tekagami*” together with “*Moshiogusa*” (National Treasure, in the collection of the Kyoto National Museum), created by Ryōhan (1790–1853), the 10th head of the Kohitsu-ke family and “*Kanbokujō*” (National Treasure, MOA Museum of Art, Shizuoka), compiled by Ryochū (1655–1736) of a branch family, Kohitsu Bekke. It has been thought that the album, “*Minuyo-no-Tomo*” is the work compiled by the Kohitsu-ke family, and its content is noted for its similarity to “*Moshiogusa*.”

However, in the previous studies of this series, the author focused on the arrangement of fragments in the albums (the order of the calligraphy fragments and overall composition) and compared the three albums, and confirmed that each has distinct characteristics, reflecting the era and the preferences of their creators (compilers). In other words, while “*Moshiogusa*” and “*Minuyo-no-Tomo*” have been considered similar and attributed to the same person (Ryōhan), it cannot be definitively concluded that they were produced by the same individual.

Therefore, this paper focuses on the ancient calligraphy fragments included in both albums, and by comparing and verifying the connections between the fragments common to both albums, it examines their relationship and also discloses information regarding the inscriptions on the back side of the albums mentioned in the previous paper. Furthermore, focusing on the ancient calligraphy fragments included in the album “*Minuyo-no-Tomo*,” descriptions concerning the “*Hyūga-gire*” fragments attributed to Prince Munetaka can also be confirmed in the Kohitsu-ke family materials (in the collection of the KEIO Institute of Oriental Classics Shido Bunko Century Akao Collection). Although a thorough investigation of these materials was not possible, I wish to mention them within the scope of what is known to date.

出光美術館研究紀要 第三十一号

(二〇二五年度)

二〇二六年三月二十五日

公益財団法人

編集  
発行  
出光美術館

東京都千代田区有楽町一丁目九一四  
電話 〇三―三三二二―三一九四〇二

制作・印刷 東洋美術印刷株式会社